

ケプラー・あこがれの星海航路

《最終稿》

作 篠原久美子

登場人物

ヨハネス・ケプラー（三才〜四十五歳）通称ヨハン

ハインリヒ・ケプラー（0才〜四十二歳）その弟

天使（中年以上の男性）

母カテリーナ・ケプラー（二十六歳〜六十八歳）その母

父ハインリヒ・ケプラー（二十七歳〜四十二歳）その父

マルガレーテ・ケプラー（十歳〜三十七歳）その妹

祖父ゼバルダス・ケプラー（五十三歳〜六十八歳）その祖父

祖母カテリーナ・ケプラー（四十六歳）その祖母

叔母クニグント・ケプラー（二十五歳）その叔母

叔母カテリーナ・ケプラー（二十三歳）その叔母

叔父ゼバルダス・ケプラー（二十二歳）その叔父

バルバラ・ケプラー（二十三歳）その妻

ミハエル・メストリン（三十八歳〜六十五歳）大学教授

オルトルファス・ツェツケン（二十六歳〜四十五歳）友人

オーベルドルファー（三十代〜五十代）医者・視学官（教師の監察官）

コリナス・ヴィルクマン（十六歳〜三十五歳）教え子

ハンナ・スパイデル 近所の時計屋のかみさん

男1 人買い

男2 人買い

墓堀

アインホルト判事

裁判長

ウルスラ・ラインボルト 証人 レオンベルクの市民

バステイアン・マイヤー 証人 レオンベルクの市民

ダニエル・シュミット 証人 レオンベルクの市民

マリア・フリック 証人 レオンベルクの市民

ヴァイルの町の人々

第一幕 天使が家にやってきた！

暗闇の中から、宇宙のシンフォニーが聞こえる。

それは一六一九年にケプラーが『宇宙の調和』の中で「発見した」とされる音楽に基づく曲で、これが全体のテーマ曲になる。

その音楽の中、舞台に一つの窓と揺り籠が見えてくる。窓の外にはビー玉くらいの大きさの地球が見えている。赤ん坊が泣き始め、その声が大きくなると、舞台はゆっくり明るくなる。窓外の地球は消えていく。

一五七四年、十二月二十七日。夜。神聖ローマ帝国（現ドイツ）、ヴァイル町。

元毛皮商で元市長であったケプラーの祖父・ゼバルダスの、元りっぱな家の一室、ベッドの後から、いきなり天使が現れる。

天使
いないいない、ばあー！

現われたのは、明らかに二十世紀の人間と分かる服装をした、中年の天使。

赤ん坊はピタリと泣き止む。

天使
ほーら、泣き止んだ。違うよ、おい。引き付け起こしてるよ、スプーン！

天使は枕元のスプーンを取ろうとするが、手がテールブルをすりぬける。

天使
うわ、すりぬける！ おーい！ 誰かきてくれー！ 赤ん坊が引き付け起こしてるよー！

その声が聞こえたかのように、颯爽と入ってくる、ハインリヒ・ケプラー（父二十七歳）彼は旅支度を

している。

天使 助かった！

ハインリヒ (天使を無視して子供用ベッドに近付き、いきなり演説口調で)

おお、天使の祝福を受け、安らかに眠るみどりごよ！

天使 すみません、祝福したら、引き付け起こしちゃいました。

ハインリヒ 今宵、父は旅立つ。

天使 スプーン、そこにありますんで、

ハインリヒ 北へ！ 彼の戦乱の地、ネーデルランドへ！

天使 ；って、聞こえていない？ (何かギャグを言う) やっぱり聞こえていない！

ハインリヒ 何故にと聞いてくれるか、わが子よ。

天使 守護天使だったのに、初対面で生まれたばかりのケプラー殺してどうすんだよ、俺！

ハインリヒ いや、幼すぎるお前には分かるまい。

天使 頼む、スプーンを取ってくれー！ こうやるだけでいいんだ！

と、天使がスプーンを取る仕草をみると、ハイ
ンリヒも取る。

天使
お！

天使はスプーンを赤ん坊の口のなかに入れる仕
草をする。と、ハインリヒもそれに従う。赤ん
坊は再び泣きだす。天使はほっとするが、ふと
思いついて、スプーンで頭を叩いてみると、
ハインリヒもする。「これはおもしろい」と思っ
た天使は、ハインリヒに、百面相をさせたりす
る。なおハインリヒは、これら一連の動作を、
ただ何となく、魔がさしたようにしてしまうの
であって、この動作の間も、演説は続けている。

ハインリヒ

ネーデルランドは今、戦乱の真っ只中にある。不遜なるプ
ロテスタントどもは、恐れ多くも、フェリペ二世陛下に対
し、謀反を起こしおったのだ。逆賊・プロテスタントども

母カテリーナ

を蹴散らし、フェリペ二世陛下とカトリックのために、父は戦うのだ！ お前の父は、カトリックの守護神として、永遠に讃えられるのだ！
バカなことやってんじゃないよ、この世紀末の座敷わらしが！

いつのまにか、母・カテリーナ（二十六歳）が登場していた。

ハインリヒ

言うに事欠いて何てこというんだ、この妖怪・口先き女が！

母カテリーナ

何とでもお言い。あんたがカトリックの守護神になれるわけやないんだから！

ハインリヒ

やってみなけりや分からないだろうが！

母カテリーナ

ハインリヒ

可能性を踏みにじるな！ 農夫がカトリックの守護神になつて何が悪い！

母カテリーナ あんたプロテスタントでしょうが！

天使 ……そりやなれないわ。

ハインリヒ 男は、細かいことは気にしないのだ！

母カテリーナ 細かくないわ、根っこでしようが、そこが！ だいたいね、ネーデルランドって言ったら、昔っから政治も貿易も市民が自

治権持つてるのよ。その利権を分捕ろうって、スペインが勝手に占領しちまつたんじゃないか。だいたい、フェリペ二世なんてスペインの皇帝でしようが。カトリックの国の皇帝が、何が嬉しくて、プロテスタントの国に居座ってんの？え？

ハインリヒ それは、その、カトリックが、強いからだい！

母カテリーナ その、強いカトリックのスペインに対して、弱いながらも、プロテスタントのネーデルランドが蜂起したんだよ。ルター派のケプラー家としたらネーデルランドにつくのが筋ってもんじゃないの、

天使 そのとおり。

母カテリーナ え、違う！

ハインリヒ そう…なんだけどき、ルターだって、許してくれるよ、この場

合。だって、スペイン、強いもん。やっぱ、駄目でしょ、弱い方に付きちゃ。

天使
だめだこりゃ。

母カテリーナ
あんたね……許す訳ないでしょ、ルターが。いいかい！ 今を去ること五十と七年前、神をも恐れぬカトリック教会の連中が、免罪符なんて馬鹿な物を売り出したとき、

天使
免罪符？

母カテリーナ
当時三十四歳だった神父、マルチン・ルターが、教会からの破門覚悟で、九十五箇条の抗議文を公表したんだよ。破門や弾圧も怖れずに、たった一人で強大なローマ・カトリック教会に抗議したルターが、「スペインが 強いからカトリックに着きまーす」ってあんたを、許すと思ってるのかい！

ハインリヒ
うゝ……

母カテリーナ
なに唸ってんだい？あたしに言い返したいのに、あたしを上回る説得力のある言葉が出てこないのが悔しいのかい？

ハインリヒ
その通りだ！ ちくしょー！ 俺には思想なんかにもないんだ。ただ、負ける方に付きたくないだけなんだ！

赤ん坊泣き出す。

母カテリーナ

それならなんで、ネーデルランドが負けるって、決めてかかってんのさ。今回はイギリスだってテコ入れるかもしれないでしょう。何の根拠があつて、そこまでスペインが強いつて思い込んでんのよ。ほら、根拠があつたら言いなさいよ。

天使

あのう、ちよつと。

ハインリヒ

だって、スペインは無敵艦隊だぞ。無敵って負けないんだぞ。

天使

（赤ん坊をあやす）ベロベロベー。（赤ん坊泣きだす。）

母カテリーナ

アツハツハツハいまのが根拠かい。じゃあ、あたしはそれ以上確かな根拠を示してやるよ。スペインは負ける。

ハインリヒ

なぜだ！

母カテリーナ

あんたがスペインにつくからさ。

天使

すみません。子供、泣き出しちゃいました。

ハインリヒ

うるさい！スペインは負けないつたら負けないんだ！なにせ、三年前、レパントの海戦でトルコを破ってからは破竹の勢い。スペインが動けばヨーロッパが震えるって……合ってる？

母カテリーナ・天使

合ってるよ！

ハインリヒ

そういう勢いなんだ。

母カテリーナ

あん時は、あんた、トルコ軍にいたんだろ？

ハインリヒ

あん時はトルコが無敵って言われてたんだあー！

母カテリーナ

あんた、入る軍、入る軍、必ず負けるんだから、家にいて商売にでも精を出した方がいいって思わないのかい？

ハインリヒ

今までは運が無かっただけだ！

母カテリーナ

大丈夫。あんたは別に運がないわけじゃないから。

ハインリヒ

そう思う？

母カテリーナ

あんたにないのは運じゃなくて、知力、体力、忍耐力、理性、感性、勤勉、実直。名もなく、貧しく、美しくもなく。

天使

うまい！

ハインリヒ

ちくしょー。黙りやがれ、この、生意気女め！（突然殴る）

天使

危ない！（倒れるカタリーナを支えようとするが）すりぬけちゃうんだ、これが。

母カテリーナ、倒れる。

母カテリーナ よくもやったねー！

天使 大丈夫ですか、と言つても助け起こせない。(ハインリヒに) 女性を殴るなんて最低だぞ、と凄んでも聞こえない。

ハインリヒ やったがどうした、口先女、地獄で舌をぬかれやがれ！

母カテリーナ 私は、殴られれば殴られるほど、燃えるタイプだつてこと忘れたのかい！

天使 ファイト！

二人、取っ組み合いの喧嘩を始める。

天使 止めろと言つても奇跡は起きない。奇跡はキリスト、予言はノストラダムス、変身はカフカ、魔法使いはハリー・ポッター。おい、天使つて本当に役に立たないな。

赤ん坊、激しく泣く。夫婦は「行かせろー」「行かせるもんかー」と、とつくみあいを続ける。そこへ、

三歳のヨハネス・ケプラー（ヨハン）が入ってくる。喧嘩をする両親の間をすりぬけ、赤ん坊をあやしはじめる。

ヨハン

よし、よし、なくんじやないよ。パパとママは、いしよがしいんです。おにいちゃんがあそんであげるからね、いいこにしよ
うね。

天使

おにいちゃん？ ヨハネス・ケプラーは長男だろう。

叔母クニグント（二十五歳）、叔母カテリーナ（二十三歳）、祖母カテリーナ（四十六歳）が入ってくる。

叔母カテリーナ

まあーハインリヒが泣いてるじゃないの、かわいそうに。

天使

ハインリヒ？ え？ この赤ん坊がハインリヒ？

祖母カテリーナ

（夫婦の喧嘩に割って入り）カテリーナ！ このとんでもない嫁が、またハインリヒをいじめているんだね。（と父ハインリヒをかばう）

天使

えっと、いまのハインリヒは父親の方だな。

クニグント

母親はなにやってんだよ、まったく、カテリーナ！

母カテリーナ

うるさいね、今、手が放せないんだよ！ ハインリヒ、行くんじ

やないよ！（ハインリヒを捕まえている）

天使

父親。

祖母カテリーナ

（赤ん坊に）ハインリヒ、泣かないでねー。

天使

子供。

クニグント

ちよつとお、なんで、ヨハンがハインリヒをあやしてんのよ！

天使

ヨハン？

祖母カテリーナ

悪いお母さんですわねー。

母カテリーナ

ちよつと、カテリーナ！ 子供に変なこと吹き込むんじゃない

よ。

天使

え？ おばさんも、カテリーナ？

祖母カテリーナ

（赤ん坊に）可哀想なハインリヒ。

天使

子供。

祖母カテリーナ

（父親に）可哀想にねえ、ハインリヒ。

天使

父親。

祖母カテリーナ

お放し、カテリーナ！

天使
ああー！ どうして昔のヨーロッパ人って、一族にみんな、

おんなじ名前を付けるんだー！

クニグント
なんで、まだ三つのヨハンがハインリヒあやしてたのかって聞いてんのよ、あたしは！

天使
ちよつと待て。ヨハン？ この子供が、ヨハン？

叔母カテリーナ
はい、ハインリヒ、いい子ですねー。

祖母カテリーナ
ハインリヒをお放し！ このあばずれ！

クニグント
ちよつと、母さんを放しなさいよ、カテリーナ！

天使
そう言えば先刻、レパントの海戦が三年前って言ってた？ てことは今……？

母カテリーナ
お義母さん、出てこないですよ、お義母さんが出てくるとまとまる話もこじれるのよ！

祖母
まあ！

天使
確か、レパントの海戦は千五百七十……一年、てことは、

ハインリヒ
それが姑に向かって言う言葉か！（殴る）

天使
え？ 今、一五七四年？

叔母カテリーナ
やめてー、暴力は嫌いよー！ みんな仲良くしましょうよー！

(泣く)

天使 え？　なんで？　俺は確かに一五七一年って言ったよな？

母カテリーナ うるさい、カテリーナ、泣くんじゃねえよ。

天使　　なんで三年違ってんのお？　今日って、ヨハネス・ケプラーの
生まれた日じゃないの？

クニグント　　ちよつと、こんな優しい妹に向かって、なんて口きいてんのよ、

カテリーナ！

母カテリーナ　泣きやあ済むって問題じゃないでしょ！

クニグント　　あんたには情ってもんがないのかい！　だからあたしは反対
したんだよ。兄さんの嫁に、素性の怪しいみなしごなんてやめ
なつて。

母カテリーナ　あんたね、そういうこと言うんなら、こつちだって、黙っちゃ

いないよクニグント。

クニグント　　なんだい！

母カテリーナ　この、出戻り！

クニグント　　くっ！……しょうがないだろ、ダンナがあたしの食事に、毒、
盛って殺そうとしたんだから。

母カテリーナ ああ、そうかい、あたしやてつきり、あんたがダンナに毒盛つ

て、おん出されたんだと思ったよ。

クニグント なんだったって？

叔母カテリーナ やめて！お願い、喧嘩はやめてえー！

クニグント・母カテリーナ うるさいね！

クニグント ピーピーピー、泣いてじゃないよ、カテリーナ！。

母カテリーナ ほら、ヨハンだって泣いてないだろう、このグズ！

天使 やっぱ、ヨハネス・ケプラーこっちかい！

叔母カテリーナ 酷いわー！（ますます泣く）

天使 こっちが天才科学者ヨハネス・ケプラー？ じゃ、俺が祝福し

ちゃったのは、頭の弱い弟の方？

祖母カテリーナ （叔母カテリーナに）誰だい、こんな優しい子を泣かしたのは！

（母カテリーナに）

天使は、最初にあやした赤ん坊の守護天使になる、ってことは

……

叔母カテリーナ いいの、お母さん、私が悪いの。だから、みんな喧嘩しないで。

（泣く）

天使

えー、俺、こいつの守護天使やんのー？

母カテリーナ

喧嘩売ってんのかい、クニグント！

天使

シヨックだ！

外から酔っ払った叔父ゼバルダス（二十二歳）が歌
いながら入ってくる。

叔父ゼバルダス

もーみのきー、のーみのきー、あれ？

母カテリーナ

この天然馬鹿の酔っ払い！

クニグント

先刻から黙って聞いてりや、あんたね！ ダンナの弟や妹にむ

かってなんて口きいてんたい！

母カテリーナ

あんたがいつ黙って聞いてたつてのよ！

祖母カテリーナ

このろくでなし嫁が！ 少しは兄弟を大事にしようって気は

ないのかい！

母カテリーナ

冗談じゃないわよ！ しょっちゅう酔っ払ちや問題起こして

る弟と、ダンナに毒盛って出戻ってきた妹に、教会のボランテ
ィアばかりやって嫁にも行けない妹。おまけに、夢みたい

な事ばかり言ってる夫と二人の子供を養ってるこっちの身にもなってよ！

叔父ゼバルダス
メリークリスマス！

母カテリーナ
二日も前におわったクリスマスネタにいつまで酔っ払ってんだい！

祖母カテリーナ
どこへ行くんだい、ハインルヒ！

母カテリーナ
（夫を捕まえ）コラ！ どさくさ紛れに逃げようたって、そ
うはさせないよ！

ハインルヒ
離せ！ 離せばわかる。

祖母カテリーナ
ハインルヒ、行かないでくれ！ 手をお離し、あばずれ！

母カテリーナ
この人を行かせたいのか、行かせたくないのかどっちなのよ、
お義母さん！

叔父ゼバルダス
（歌う）主ーよ、みもーとに、ちーかずかんー

クニグント
離せつつつてんだよ！

叔母カテリーナ
どうしてみんな喧嘩をするの？（泣く）

ヨハン
（ハインルヒをあやしながら）

母カテリーナ
うるさいよカテリーナ

祖母カテリーナ

(同時に) 放しなさいカテリーナ

クニグント

(同時に) ふざけんじやないよカテリーナ

天使

わたしは何にもできません。天使って、ホント役立たず。

そこへ、祖父・ゼバルダス(五十三歳)が出てくる。

祖父ゼバルダス

(大音声で) どのいつもこいつも、うるさい！ 静かにせんかあ

ー！

叔父ゼバルダス

メリークリスマス！

祖父ゼバルダス、一人一人、全員を殴っていく。(もちろん子供たちは除く)

祖父ゼバルダス

(祖母カテリーナを殴りながら) お前まで、何をやってるんだ、

カテリーナ！

天使

ばあちゃんもカテリーナかい……

父ハインリヒだけは、祖父のパンチを躲して逃げていく。祖父ゼバルダス、躲されて倒れる。

ハインリヒ

わたしは再び戦地に赴く！　さらばだ、諸君！

ハインリヒ、高笑いにマントを翻して去っていく。

母カテリーナ

戦地になんかに行かせるもんか！

母カテリーナ、奥に引っ込んだかと思うと、すぐさま荷物をかかえて戻ってくる。

クニグント

カテリーナ、あんた、その荷物は一体、何？

母カテリーナ

決まってるんじゃないの。あの人を追っ掛けて行って、捕まえて連れ戻すんだよ！（靴を履き変え、上着を着、ショールを被ったりしながら）

祖母カテリーナ

じよ、冗談、冗談じゃないよ！　子供をどうする気だよ。

母カテリーナ すみません、お義母さん。お願いします。

祖父ゼバルダス 許さんぞ！

母カテリーナ 許してもらう必要なありません！

叔母カテリーナ 子供を捨てていく気なの？

母カテリーナ あの人を連れ戻すまで、預かってくれって言ってんだよ。

祖母カテリーナ 無理だよ、死んじまうよ。

母カテリーナ お義母さんだってこんな元気な子供を何人も育ててるじゃないですか！

祖母カテリーナ だめだよ、あたしや十二人産んで、八人死なせてんだよ、また死なせっちまうよ！

母カテリーナ 今時、四人も残れば充分でしょう！ みんな、とりあえず大人になったじゃないですか。

叔母カテリーナ とりあえずなのね、あたし。(泣く)

クニグント あんた、自分が生んだ子供を捨てる気かい！ なんて親だよ、全く！

祖母カテリーナ とんでもない嫁だよ。

母カテリーナ 何よ、どいつもこいつも子供子供って！ 子供なんてあの人

祖父ゼバルダス

帰ってきたら何人だって産んでやるわよ！ だけど、あの人はこの世にたった一人しかないのよ！ じゃ、よろしく！
この、罰当たりめ！

祖父が再び殴ろうとするのを躲して、カテリーナは出ていく。躲されて祖父・ゼバルダスは尻餅をつきながら、悪態をつく。

祖父ゼバルダス

ぶっ殺してくれー！

祖母カテリーナ

あー、悪魔が取りついてるんだよ、この家には……

叔母カテリーナ

教会にいきましょう、明日みんなで教会に……（泣く）

クニグント

どうせ私は出戻りだよ。

叔父ゼバルダス

（殴られてのびていたのが起きて歌う）しゅーよ、みもーとにー。

退場

天使 疲れる家だー。

ヨハン

（泣き出した赤ん坊をあやししながら）なかなくてもだいじょうぶだよ。パパもママも、またいなくなちやっただけど、ハインリヒはおにいちゃんがまもってあげるからね。さびしくないよね。（ヨハンに）お前、この家で育って、よく天才になれたな。

天使

ヨハン

きょうね、おにいちゃん、おたんじょうびだったんだよ……

天使

（はっと気付いて、二人のそばによる。子供たちの肩を抱いて歌う）ハッピーバースデイ・トウ・ユー、ハッピーバースデイ・トウ・ユー・ハッピーバースデイ・ディア・ヨハン……ハッピーバースデイ・トウ・ユー

ヨハン

ふたりだけだね、ハインリヒ。

天使

天使って本当に役立たず……

しかし、泣いていた赤ん坊は泣き止み、笑う。

暗転

するとすぐに「大変だー！ケプラーン家のハインリヒがまた川に落ちたー！」という声で、天使が浮かび上がる。

天使

（通りすがりの見えない誰かに）助けてやってくれー！（やってみせる）そこから飛び込んで、そう泳いで泳いで、ガツとこうつかんで、そうそう、もうちよい、ぐわーっと引き上げて、足 足、足、引っかかっている、泣くな！ 落ちるなー！ よつと、こう…、はあー、ありがとうございます。水吐け、おい。よし…：はあー。あいつの守護天使やっていると命がいくつあっても足りない。もつとも、守護天使って死なないんでしようけどね。何の因果で一体…：（彼を天使にしたものに）分かってます、ちゃんとやります。でも俺は、天才科学者、ヨハネス・ケプラーの守護天使になりたいって言ったんですよ。…：まあ、ともかくハインリヒは元気に育ってます。二日に一回の割合で事故起こしてますけどね。遺伝ですよ。父親のね。ああ、あの父親ね、戻ってきました。戦場で敵前

逃亡して縛り首！

父ハインリヒ

ひえゝ

天使

になる所を妻のカテリーナに助けられ、

父ハインリヒ

母ちゃんごめん！ これからは兵隊なんか止めて、田舎に店でも持つて真面目に働くよ。

母カテリーナ

期待してないけど、頑張っておくれ。

天使

ところがどっこい、田舎の人間はそうそう甘くはなかった。当時の神聖ローマ帝国、今で言うところのドイツは、領主の宗教

がそのまま町の宗教になっていましたから、まあ、早い話がこのヴァイルの町一体、全部ルター派。その町に住んでいながら、カトリックの国、スペインの軍隊に入った不名誉な男を受け入れるほど、ヴァイルの人々もお人好しじゃなかった。

ヴァイルの人々

恥知らず、恥知らず、恥知らず。ヒソヒソヒソ……（通り過ぎる）

天使

いたたまれなくなつて、一家はヴァイルからちよつと東へ行つたレオンベルグという町に引っ越して、居酒屋をはじめが……

父ハインリヒ

俺はやっぱりこんな田舎で人生を終わる人間じゃない。たとえ戦場には行かなくとも、その豊富な経験をいかし新型武器の開発に携わろう！

母カテリーナ

(いやな予感) 馬鹿がつまんない事考えるんじゃないよ。

父ハインリヒ

見てくれ母ちゃん、この火薬、

ドッカーン！と爆発。

天使

家の一部屋をふっ飛ばし、この間抜けな父親は顔に大火傷をして当分働けなくなった。

母カテリーナ

あたし達にどうやって食って言って言うのよ、あんたは、もう！

父ハインリヒ

うるさい、子どもでも働かせておけ！

天使

で、ヨハネス・ケプラーは八才から、農場で重労働につく。

叔母カテリーナ

あたし、教会のボランティアばかりやってないで、お嫁にいきます。

母カテリーナ

ありがとう。いえ、おめでとう。

ケプラー家全員

ばんざーい！　ばんざーい！　ばんざーい！

クニグント

あたし、この度、再婚しまーす！

母カテリーナ

あらま、おめでとう。

祖母カテリーナ

食事には、くれぐれも気を付けるんだよ！

ケプラー家全員

ばんざーい！　ばんざーい！　ばんざーい！

叔父ゼバルダス

俺、酒やめて牧師になる。

母カタリーナ

心の底から、おめでとう。

祖父ゼバルダス

まともな牧師になるんだぞー！

ケプラー家全員

ばんざーい！　ばんざーい！　ばんざーい！

天使

後の科学者に、「ガリレオやニュートンがいなかったとしても、誰かが彼らの仕事をやっただろうが、ケプラーの仕事はケプラーにしかできなかつただろう」といわれた、超ユニークな天才は、結局、この貧しく騒々しい家のために十一才まで緑に学校に通うことができなかつた。

赤く大きな美しい月が出る。それを見る四人家族（父
ハインリヒ、母カテリーナ、ヨハン、弟ハインリヒ）
の姿が見える。

天使

（皮表紙のノートを開き）『一五八〇年、私が八歳の時、両親は、
私と私の弟を「首吊りの丘」と呼ばれる、小高い丘まで連れて
いってくれた。月食を、見せるためだった。月は、真っ赤に見
えた。』これが、ヨハネス・ケプラーが自分の幼少時代について
書いた記述のなかで、たった一つ、悲惨でない思い出だった。
母さん、見て、月が、月が真っ赤だ。

母カテリーナ

ああ。

ハインリヒ

行きたいな、月。行きたい。みんなで行こう！　ねえ、行こう

よお！

父ハインリヒ

行ける訳ないだろ。馬鹿か、お前は。

母カテリーナ

誰に似たんだか。

ハインリヒ

行く、月行く、行くー！

父ハインリヒ

うるさい！（殴ろうとする）

ヨハン (かばって) ハインリヒ、お兄ちゃんが連れていってあげるよ。

ハインリヒが大きくなったら、おにいちゃんと一緒に、行こう、月、ね。

ハインリヒ ほんと？

ヨハン うん。大きくなったらね。

ハインリヒ やったー！ 月だ、月だー！ 大きくなったら、月、行くんだー。

天使 大きくなったら月へ行く？

ハインリヒ いいだろ！！

天使 ああ。

ハインリヒ (天使に) いっしょにいこうね！

天使 ああ、え？

暗転

第二幕 サイレント・ナイト

一五八九年。レオンベルク。

「大変だー！ケプラーン家のハインリヒが、また犬に噛まれてるぞー！」という声で、天使が浮かぶ。

天使

（通りすがりの見えない誰かに）すみません、そう、そのあなた、あの犬の首にこうやって、ロープかけて、引っ張って、引っ張って！ 靴！ 違う、靴、靴を噛ませる！ 自分噛ませてどうすんだ。どうどう、こうやって宥めて。うわあ、落ち着けえー犬ー！ ふうー。全く！ 守護天使冥利につきるよ、ハインリヒ君は。…まあ、捨てる神あれば拾う神あり、この子供達は、そりやあもう、思いつきり、家族には恵まれませんでしたが、この地方の教育制度には恵まれました。ヨハンは奨学金をもらって神学校に進み、さらにチュービンゲン大学へ。弟の我がハインリヒは、去年から反物屋の丁稚奉公に出ましたが届ける反物ごと川に落っこちてすぐに首。今はパン屋の小僧をやってます。相変わらず、レオンベルクで、家族に守られて：

…まあ、家族全員が守っているかどうかは別として。

天使が消えると、そこはレオンベルクの、居酒屋を
営むケプラーの家の前。

一五八九年。十二月二十七日。十八才になったヨハ
ネス・ケプラーが、旅行カバンを下げてため息をつ
く。家に入ることをためらっているようだ。

ヨハン

(ドアに手を掛け) よし! (ノブから手を離し) やっぱり戻ろ
う。(踵を返す)

そこへ旅行者らしいの男(三十八才)が通りかかる。

男 学生さん。(肩をたたく)

ヨハン わ、ごめんなさい。な、なんですか、あなたは。

男 誰でもかまわんがな。あんた、居酒屋入るの初めてやろ。初々
しいなあ。いくつや。

ヨハン え？

男 年や、年。幾つや。

ヨハン はい、母が僕を身籠もったのは一五七一年五月十六日午前四時

三十七分で、母の胎内にあること二百二十四日九時間五十三分を経て、七一年十二月二十七日午後二時三十分に出生しました。今日でちょうど十八才と（懐中時計を見）三時間十八分になります。

男 えらい丁寧にすんませんなあ。

ヨハン いや、まあ……。

男 けどまあ、十八やったらもうりっぱな大人やがな。居酒屋くら

い迷わんと入ったらええねん。……わかった！ 酒が弱い！
それで仲間に内緒で酒に慣れる練習したいんや、そや、凶星や
ろ！

ヨハン たしかに僕は酒は弱いです。絶望的に弱いです。でも、別に強

くなりたいとは思いませんし、

男 （ヨハンを遮るように）凶星や！ もう、水臭いやないか。酒
ぐらい何ボでも教えたるわ。

ヨハン お酒が飲めることが羨ましいとも思っていないせんし、

男 授業料は特別免除や。そのかわり、実費としてわしの飲み代だけ払ってくれたら、ええわ。

ヨハン むしろムダだと思っています。

男 こんなええ話ないわなあ。ほな、入るか。(ヨハンの肩に馴々しく手を掛け促す)

ヨハン (その手を軽く外し) 人の話を聞いていませんね。

男 ほれ、(カバンを示し) わし旅行者やし、時々この辺の訛が、わからんようになんねん。

ヨハン 訛っているのは僕ではないと思うのですが？

男 気のせいや。なにせ、わいは、イギリス生まれのフランス育ち。

ヨハン は？

男 の、フランシス・ベーコンに憧れるとる、生粋のドイツ人や。

ヨハン なんですか、それは。

男 ま、ええがな、で、学生さんどちらから？

ヨハン チュービンゲンです。

男 チュービンゲン大学かいな、優秀やなあ。まー、えらい難しい

本読んで。（本のカバーの名前を見て）ケプレルスはん？

ヨハン
ケプラーです。

男
ケプラーやったらスペル違うやんか？

ヨハン
大した問題じゃありません、名前のスペルなんて。

男
細かいことにはこだわらんタイプやなあ、数字のときとはえらい違いや。

ヨハン
数字は神聖な神の言葉ですから。

男
ほう。まあ、旅は道連れ世は情け。こうして居酒屋の前で会ったのも何かの縁。今日はこの居酒屋でゆっくり語りあおうやないか。

ヨハン
あの、静かに語りながら飲みたいなら、この店、やめた方がいいですよ。

男
なんやねん。急に真面目な顔しておって。居酒屋が多少喧しいのはしゃあないや……（ないか、と言い終わらないうちにドアを開けてしまう。）

ドアを開けた瞬間に、

母カテリーナ

婆あ、ふざけた言い掛り付けると承知しないよ！

という声が飛びかっている。居酒屋の中。ヨハネス・ケプラーの家。カウンターと一組のテーブルがあるばかりの粗末な店。棚にはガラスに入った薬瓶が並んでいる。ここは母のカテリーナが内職で始めた、薬草売りの商売用である。彼女が喧嘩している相手は、近所に住む時計職人のおかみさん、ハンナ・スパイデル。

男

な、なんや？

ハンナ

冗談じゃないよ！ 家の孫はね、あんたの調合した薬で死にか

けたんだよ！

母カテリーナ

あたしの熱冷ましの薬に何の文句があるってんだよ！

ハンナ

熱は下がったさ、だけど、あんな恐ろしい副作用があるなんて知らなかったよ！

母カテリーナ
それは菓のせいじゃないって何度いったら分かるんだ！

ハンナ
人の孫を殺しかけといて謝りもしない！ 金輪際、あんたとは

口を利かないからね！

母カテリーナ
あんたみたいな分からず屋、こつちから願ひ下げだね！

ヨハン
(気弱に) 母さん、いい加減にやめましょう。

男
かあさん？

ヨハン
(卑屈なほど低姿勢で) スパイデルさん。本当にすみません。
母がご迷惑をお掛けして。

母カテリーナ
事情も分かんのにいきなり謝るんじゃないよ、この意気地なし！

ヨハン
母も悪気はなかったと思います。つい、うっかり、何かの菓草の調合を間違えただけで…

母カテリーナ
ヨハン、あんた、あたしを馬鹿にしてるのかい！

ヨハン
母も口ではああいっています反省していると思えますので、これからどうぞよろしく願ひします。あ、そうだ、あ、僕こんど時計をもらいにかがいますので、おじさんにそうお伝え下さい。懐中時計、止まっちゃって、チュービンゲンに

も時計職人はいるけど、やっぱりスパイデルさんじゃなきやつて、持って帰ったんです。

ハンナ
そうかい。

母カテリーナ
ああ、気持ち悪い。

ヨハン
（泣きそうになっている）本当に、このたびは申し訳ありませんでした。どうか、広いお心で、お許してください。

ハンナ
もういいよ。ニーナは無事だったんだし。あんたも大変だろうけど、しつかりね。

男
おかみさん、ちよつとすみません。一つ伺いたいんですけど、そのお孫さんの熱冷ましの副作用いうんは、何やったんです？

ハンナ
孫のニーナはね熱が下がって、表に出たとたん、なんとあなた、池に落っこちたんですよ。

男
池？

ハンナ
ええ、あの娘は池に落ちるような娘じゃありません。きつとあの娘が、熱さましの中に、何か池に落ちるような薬を入れたに違いないんだ。でも、あたしはあんたに免じて許すことにするよ、ヨハン。それじゃあ、時計、待ってるからね。

ハンナ、出ていく。

母カテリーナ (嘲笑う) 事の真相はこれだよ、ヨハン。

ヨハン 母さん。(近寄る)

母カテリーナ しっかりおし！ 訳も分かんない内から一人で勝手に卑屈になるんじゃないよ！

ヨハン 母さん、御免なさい、本当に御免なさい、僕……

そこへ妹マルガレーテ(十才)があわてて飛び込んでくる。

マルガレーテ お母ちゃん！ お父ちゃんが、お父ちゃんが…… (泣く)

母カテリーナ どうしたの！

マルガレーテ マイヤーさんの店で、カードで負けて、

母カテリーナ 負け金取り立てにくるのは誰だい！

マルガレーテ だれも来ない、父ちゃん逃げちゃって、こんどはナポリ艦隊に

母カテリーナ

入るって言って出てっちゃった〜！（泣く）
あのろくでなし〜！ 行かせるもんか〜！

母カテリーナ、走り出ようとする。マルガレーテ、
泣きながら、母に抱きつく。

マルガレーテ

母ちゃん、行っちゃやだ〜！

ヨハン

母さん、行くな！ あんな親父、もう連れ戻す必要なんかない！

母カテリーナ

あたしはあの人死ぬのも、人殺しになるもの嫌なんだ！ お
退き！

母カテリーナ、出ていく。

マルガレーテ

母ちゃん！

ヨハン

マルガレーテ、泣かなくてもいいよ。お兄ちゃん、牧師になつて戻ってくるからね。そうしたら、もう、マルガレーテは、な

らず者の娘じゃなくて、牧師の妹だよ。泣かないで。

マルガレーテ、奥へ行く。

ヨハン (男に) すみませんでした、お客さん。

男 いや、おまえさんも若いのに色々大変やな。

ヨハン 言った通りでしょう。この店じゃ静かに飲めないって。

男 今は静かや。すまんが、ワインくれんか。それと、何か残ってたら、温めてくれたら嬉しいなあ。あと、パンな。あ、あんたも一緒にどうや

ヨハン ……。

男 ……金は払う。

ヨハン ありがとうございます。

ヨハンはカウンターに入り、料理を温める。男はヨハンの本を開いたり、挟んであつた数枚の試験用紙を眺めたりしている。

男　なあ、ケプレルスはん。

ヨハン　ケプラーです。

男　あ、ケプラーはん。

ヨハン　ヨハンでいいですよ。

男　なあ、ヨハンはん、あんた地球は動いてるって思ってるか？

ヨハン　あ、それ！

男　（本を上げて）コペルニクスの原書の写しやな。

ヨハン　あなたも天文学をおやりになるんですか？

男　まあ、専門やないけどな。

ヨハン　ぼくも学芸科ですから専門ではありませんが、天文学は大好きなんです。神の声を聞く学問ですから。

男　神の声？

ヨハン　はい！

男　へえ！　そういえばさつき、牧師になって戻って来る言うてたな。

ヨハン　まあ、ええ……。

男 ほしたら何で神学科でないねん

ヨハン え？ それは……。

男 そんなで、どうや。地球は、動いてると思うか？

ヨハン 思う、思わないじゃありません。地球は、事実、動いているんです。

男 えらいあっさり言うな。あんた、牧師になるんやろ。

ヨハン はい。

男 「太陽はその出でたるところに急ぎ行く」動いてるのは太陽や、と伝導の書、第一章は言うとするやないか。

ヨハン 言葉の綾ですよ。(カウンターから出て、給仕をしたりしながら) 賭けてもいいですけど、地球が動くって事実が当たり前 になつても、人は多分「日は昇り、日は沈む」って言いますよ。聖書の表現方法なんて、僕に言わせれば枝葉末節です。

男 あんた、牧師向いてないわ……。

ヨハン 何故です？ 僕は神そのものの声が聞きたいだけです。事実の背後に隠された神のメッセージが知りたいんです。なぜ神は地球を動くように作ったか。なぜ、僕はこの家に、あの父の子と

して生まれたのか。なぜ、僕は人に犬のようにへつらつてしま
うのか。そしてそれにはたぶん、星の動きが、人の運命に大き
く関わっているからだと思うんです。

メストリン

星？

はい。整然とした、そして、時に気まぐれな星の動きの意味を
知ること、人や自然の存在も見えてくる。そして、その意味
を探る道しるべが、数学という神の言葉をひもとくことだと思
うんです。

ほう、そりや占星術やな。一緒にどうや。

ヨハン

はあ。

男

それであんた、自分の受胎した日まで計算したんやな。

ヨハン

僕の受胎日は、その日しかないんです。一五七一年、五月十六
日。両親が結婚した日。

男

（ヨハンがイスにシヨールを敷き、そつと座るのを見て）なん
や。痔？

ヨハン

（大きく頷く）

男

そりや、たいへんやな。

ヨハン 大変ですけど、少し嬉しいんです。

男 痔が？

ヨハン はい。僕、そのほか、近視で乱視で、腸と肝臓も悪いんですけど、それも嬉しいんです。そのことが、母の身の潔白になっているんで。

男 は？

ヨハン 僕、結婚七カ月目に生まれたんです。僕が病気になるたびに、母は「この子は早産だから体が弱くて」と言うんです。すると父は少しは信じるんです。僕が自分の子だってことを：（パンをかじりながら）変ですな、ぼく。何であなたにこんなことしやべっているんだろ……

男 そのパン固いやろ？

ヨハン 固いの、いつまでもくちやくちや食べるの好きなんです。犬みたいでしょう。（水を飲む）

男 （ワイン）飲むか？

ヨハン 僕は、あの父の子供でなんかいたくない！ でも、母には、潔白であってほしいんです。

男 ほれ。(ワインをすすめる)

ヨハン 飲めないんです。

男 さよか。

ヨハン でも、飲みます。(飲む。)体に良くないのに……。

男 たまにはいい。

ヨハン 月が、悪いんです。

男 はい？

ヨハン ぼくが生まれたとき、月は、火星と水星に対して、三分の一の座、つまり、丁度、百二十度の位置にあつたんです。だから僕、頑固で貧乏で、卑屈なんです。

男 よう調べたな。

ヨハン 調べ始めると僕しつこいんです。

男 あんた、牧師やめろ。

ヨハン え？

男 科学やれ。

ヨハン え？

男 わいには、お前がなんでこの家に生まれたんかは分からん。け

どな、この世に何で貧乏があるかは分かるで。

ヨハン
え？

それはな科学技術が未発達やからや。

ヨハン
科学技術が？

そや。この世で人を一番不幸にするものはなんや。

ヨハン
働かない父親。

それもある。けど、もっと大規模にや！

ヨハン
え？ ……戦争？

そや。戦争、伝染病、天災……。どや、科学技術がちゃんと発達したら止められるもんばかりや。科学の発達が天災を予測し、技術の向上が災害を食い止め、医療の躍進が伝染病に打ち勝つ！ そして戦争！

ヨハン
はい！

バスコ・ダ・ガマって知ってるか？

ヨハン
もちろんです。喜望峰を廻ってインドに達したポルトガル人ですよね。

男
そや。これがどういいうことか分かるか？ え？ 地球がな、地

球が、狭くなってるんや！

ヨハン

地球が、狭くなってる？

男

そうや。科学技術の一番すごいところはな、地球を狭くすることなんや。昨日まで遠い国やったところがお隣さんになるんや。お隣さんやったら、何があつたかて、ひよいに行つて助け合えるやないか。つまりや、国境いうもんが意味の無いものになるんや。どや、科学は、地球を狭くし、人と人とを近づけ、国境と戦争を、なくしていく道具なんや。すごいやろ？

ヨハン

……すごい、そう言うあなたも凄い！

男

そやろ？ フランシス・ベーコンの受け売りや。

ヨハン

はい？

男

とにかくな、すぐに来よるんや、国境のない時代が、もう目の前まで来とる、と、ベーコンは言つとる。そいでな、ここからは、正真正銘、わいの持論やけどな、天文学は、そういう、地球を狭くする船が航海するために必要なんや。(テストを開き) あんた、天文学向いてると思うわ。このラテン語の答案用紙、見事や。

ヨハン あ。それはちよつと……

男 ま、見せたくないわな、なんや、この解答は。「ミゼラス オム

ノムメントス」くらいのスペル間違えとつて、よく牧師になるなんて言えるな。「これぞ人智の惨めさよ」や。

ヨハン はあ……。

男 わいが「見事や」言うたんは、「こつち、この答案用紙の後ろの

図表や。試験中にようもこんだけ考えたわ。「六つの惑星間に五つの図形を置くことによつて考察する惑星間の距離」……おもしろいわ。おもしろい発想や……。あんたは、言葉にこだわりのない人間や。人に説教する牧師には向いとらん。しかし、この図形と計算式、あんたの数学がどれだけ凄いもんかは一目瞭然や。あんた、天文学やれ。天文学やつて、国境なくして、戦争も貧乏も、なくしたれ。

ヨハン ……あなたは、どなたです？

男 ミハエル・メストリン。あんたが通つとるチュービンゲン大学

の数学教授や。

ヨハン 教授う？

メストリン

そない驚かんでええがな。学芸科のミユラー教授、あいつからお前の話を聞いたんや。ヨハネス・ケプラーいう変わり者がおるってな。減法数学が出来るくせに、神学討論会でコペルニクス擁護し出す阿呆やて。そいで、どうせ休みで暇やさかい、名簿調べて阿呆の顔見に来たんや……来た甲斐あったわ。

弟ハインリヒ（十五才）飛び込んでくる。全身濡れて腕に火傷、服の袖は焦げているがそんなことには全く頓着しない様子で、嬉しそうにヨハンに飛び付く。そのすぐ後から、へとへとに疲れた天使が登場する。

ハインリヒ

兄ちゃん、兄ちゃん、兄ちゃん！ 兄ちゃん、お帰り！

ヨハン

ハインリヒ、又川に落ちたのか？

ハインリヒ

うん！

ヨハン

（腕を見て）どうしたんだ、この火傷！

ハインリヒ

乾かしたからね、もうね、大丈夫でね、痛くないの。

ヨハン

痛くない訳ないだろう。おいで。（カウンターの中から桶に持つ

てき、ハインリヒの傷を洗ってやり、薬を塗ったりしながら）
お前、どうして川に落ちて、火傷できるんだ？

天使
（息を切らせながら） 事故に関するかぎり、彼の辞書に不可能の文字はない。

ハインリヒ
でもね、またね、天使が助けてくれたんだよ。（天使に）ありがとうでした。

天使
はいはい。

メストリン
天使？

ヨハン
弟には天使が見えるらしいんです。

メストリン
ほんまかいな。

ヨハン
僕が神の実存を信じられるのは弟のおかげなんですよ。

メストリン
そりゃえらい具体的や。

ハインリヒ
兄ちゃん、さつきね、スパイデルさんに会ったらね、兄ちゃんが来てるって言って、走ったらね、川におっこちてね、（薬が染みた）痛いよー！（泣く）

ヨハン
川に落ちて、それから、ハインリヒ？（包帯を巻いてやる）

ハインリヒ
（泣きながら）フェリガーさん家のかまど開けたら熱かったの。

ヨハン おまえ、パン焼きの竈開けて乾かそうとしたのか？

ハインリヒ (まだ泣いている) うん。

ヨハン パン……どうなった？

ハインリヒ シュウウウウウウーってしぼんだ。(ちよっと笑う)

ヨハン 動かないで……フェリガーさん、なんか言っただけだったか？

ハインリヒ うん。明日から、来なくていいって。

ヨハン そっか。じゃ、兄ちゃんと一緒にお休みだね。

ハインリヒ ほんと？

ヨハン うん。

ハインリヒ やったー！ お休みだー、お休みだー！

ヨハン (メストリンに) 天文学は家族を養えますか？

ハインリヒ お休みだー！

ヨハン 国境と貧乏がなくなるのと、この家族が餓え死にするの、どっ

ちが早いと思います？

メストリン ……

ハインリヒ 兄ちゃん、休みだからさ、一緒にどっかいこうよ。

ヨハン 牧師に、ならなきや。

ハインリヒ　　そうだ、月だ、月に行こうー！

　　どやどやと、ならず者風の男二人が入ってくる。

男1　　おい、こっちだ。

ヨハン　　あ、あの、あの、お客さん、すみません。今日店はちよつと…

：

男1　　なんだ、手前は？

ヨハン　　すみません。

男2　　文句あんのか！

ヨハン　　ありません、しかし、あのう、ちよつと…

男1　　なんだ、こいつはよ、おい。(戸の外に)

　　父ハインリヒ、入ってくる。

ヨハン　　父さん…。

父ハインリヒ　　なんだ、お前、帰ってたのか？

ヨハン 父さん……ナポリ艦隊に行ったんじゃない？

父ハインリヒ これから行くんだけどさ、いや、その前にお前に会えて、父さん嬉しいな。

ヨハン お金ならありませんよ。

父ハインリヒ 親に向かって、その言い草はなんだ！

ヨハン (思わず謝ってしまう) ごめんなさい。

父ハインリヒ 人がちよつと強く出るとすぐに謝る。そういう卑屈な所が、俺そつくりだな。

男1 おい、売ってくれんのはどつちの息子だ？ 金は渡したんだからよ、早く頼むぜ。

父ハインリヒ うん。ま、その、そっち。下のだ。

男2 (ハインリヒの腕をつかみ) 来い。なに？

ヨハン (その手からハインリヒを奪い返す。ハインリヒ、驚いて泣きだす) 父さん、あんた、ハインリヒを、自分の子供を売ったのか！ (激昂)

父ハインリヒ (思わず卑屈) 怒るなよ。お前だって、こんな頭の弱い弟、い

ヨハン
ないほうが楽だろう？ 大学は続けたいだろうし、
学費は全部教会の奨学金だ！ 僕はあるから、1フロリン
だってもらっちゃいけない！

父ハインリヒ
マルガレーテだってまだ小さいし、育てるのに金がさ、

ヨハン
育てる！ あんたが？

男1
坊っちゃん。いくら奨学金もらってるからって、親にそんな口
きいちゃいけねえな。

ヨハン
！ すみません……（落ち込む）

メストリン
あほ、こんな無茶苦茶な論理にショック受けるな！ おい、子
供売ってまでのうのうと遊んどる親が子供に向かってそんな
口きくな！

父ハインリヒ
はい。

メストリン
というのがこの場合の正しい論理的展開や！

男1
なんだ、こいつは。

男2
ほら、来るんだよ！

ハインリヒ
やだ！ おじちゃんとどっか行くより、兄ちゃんと、月行く！
男1
つべこべ言わずに来い！

ヨハン
ハインリヒ！

男2
こら、離せ！

ハインリヒ
（泣く）やだー！ 兄ちゃんと月行くー！

天使
あああああー、天使ってほんと役立たず！

母カテリーナ、帰ってくる。顔に痣を作っている。

父ハインリヒ
（男2に）ゲ、何でだよ！

男2
俺あ確かに、女房の方は押さえとけて。

ヨハン
母さん……

母カテリーナ、父ハインリヒに近づく。

父ハインリヒ
いや、その……お前だって、このガキにはほとんど困ってたじゃないか、な？

母カテリーナ
（いきなり父ハインリヒの顔をひっぱたく）

父ハインリヒ
……このアマ、ふざけるんじゃないやねえ！ 手前えの夫に手え上げ

ヨハン
るとはどういう了見だ！ 根性叩き直してやる！
やめてくれ！

男2
（父ハインリヒを取り押さえて）馬鹿野郎、たいがいにしる！
男1
話が違いすぎだよ、ケプラーの旦那。俺たちやいくらなんだつて、こうまで、女子供相手に無慈悲はしたかねえや。ちゃんとよ、家族会議やって、速やかに話が付いたら、また改めて、子供売ってね。待ってるから。

男2
じゃ、とりあえず。（手を出す）やった金、返せよ。

父ハインリヒ
……金は、ない。

男2
なんだと！

男1
（2を制して）何が、輝けるナポリ艦隊に入隊するための資金援助だ。

母カテリーナ
……いくら？

男1
20フロリン。

母カテリーナ
（薬瓶の棚の後ろから、乾燥させた薬草の入っている瓶を取り出し、中から金を出す）
父ハインリヒ
そこにあつたのか……！

母カテリーナ

7フロリン……残りは少しずつでも、必ず返します。

男1

(金を受け取り、2に)行くぞ。

男1、2、出ていく。

長い間。

父ハインリヒ

(突然戸口に走り)さらばだ、諸君！ 私は輝けるナポリ艦隊の英雄となって帰ってくる！ 止めても無駄だー！

誰も止めない。

父ハインリヒ

はははははー！ さらばだー！ (マントを翻して出ていく)

ハインリヒ

母ちゃん！

ヨハン

(母を助けようとする)

母カテリーナ

大丈夫だよ、(棚から薬の瓶を取り出し)自分で出来るよ。

家族、奥の部屋に引っ込む。

ヨハン ……メストリン、教授……僕、何を考えてると思います、今。

メストリン 何や？

ヨハン ひどいですよね……僕、あんなことが起こっている最中に、弟が「月に行く」って叫ぶのを聞きながら、「そうだ、月に行けばいいんだ」って、考えていたんです。

メストリン・天使 月に、行く？

ヨハン そうです。月に行けばいいんです。月に行つて、アリストテレスを、信奉している人たちに言つてやればいいんです。ほら、地球が動いている。月を中心に回っているんだ、と。

メストリン あんた、何を言い出すんや。

天使 なぜ、そんなに簡単に、人が月に行くことを信じられる？

メストリン どうやって、どうやって月に行く気やねん？

ヨハン どうやって月に行くかなんてことは問題じゃないんです。問題

は、月から、地球の何を見るのか、運動か、地球とは違う視点で見える星か、太陽か、国境か、神か……！ 教授、僕は今確信しますよ。「月よアヤロンの谷に生まれ」と言つたヨシユアは

第三幕

ヴェネチアからの手紙

月の運動を止めたんじゃない。その瞬間、彼は月に立っていたんだ。聖書は、かく読むのだ、と！

天使
問題は、月に行くことじゃない、月から地球の何を見るかだつて……？

メストリン
……化けもんや……

天使
あなたは、本当に十六世紀の人間ですか……

暗転

「大変だー！ケプラーン家のハインリヒが鶏小屋に閉じこめられたー！」という声で、天使が浮かび上がる。

天使
（もう場慣れしたという感じで）ハイハイ、焦んない、焦んない。ほら、卵、置く。端、通って、端。泣かない。叫ばない。大丈夫、鶏は噛み付かない、ね。ほら、鍵、開けて。持つてる、

持つてる、ポケット、右。ズボン！ ハイ、サツと出て、出さない、鶏は、出さない、ほら、閉める。よしよし。傷洗って。ハイ、オツケー！ 完璧ですよ、私。もう、生まれ変わったらレスキュー隊員になれるね。我がハインリヒ君は、その後、農場で働いてまたクビになり、軍隊に入りました。まあ、入ったというか、行進について行っちゃったというか……え？ あの弟に兵隊が勤まるのかって？ それがあなた、意外と才能があったんですよ。軍隊で、ひたすら太鼓を叩く才能が。つまり、進軍する軍隊の後ろにくっついて、非戦闘員として、一所懸命、太鼓叩いてラッパを吹いてたんですね。ところが、足におできができちゃって進軍ができなくなり、その後、旅に旅を重ねて、今は……全く何を考えているんだか、街頭歌手やっています。それにズーっとついて廻ってる、私の苦勞が分かります、あなた？

(轉換)

(溜息) 兄の、ヨハネス・ケプラーはというと、大学で、もしも人間が月に行けたとして、月から地球を見たらどう見えるかってレポート書いて、教授に無視されました。結局彼は牧師にはなりませんでした。まあよせばいいのに、神学科に編入はしたんですがね。大学の最終試験を受ける前に、グラーツのプロテスト学校から、数学と天文学の教師として招かれたんです。より経済的に独立できる道を選んだって訳ですね。今は、グラーツの修道院付属学校の職員寮にいます。ああ、それから、あの父親。彼は、二度とナポリから戻ってはきませんでした。死んだ？ さあそんな噂もありますが、私はあの人の守護天使じゃないんでね、知りません！

一五九七年、九月一日。(ヨハネス・ケプラー二十六歳)
スチリア地方 オーストリア州の首都グラーツ。修道院
付属学校の寮のヨハネス・ケプラーの部屋。衝立と 椅
子とテーブルがあるだけの狭い一室。テーブルの上には
数冊の本と計算尺。その部屋の中でも目立って大きいの

は、一五九六年にヨハネス・ケプラーが考えた、宇宙の
模型である。ケプラーの生徒、コリナスが入ってくる。

コリナス 先生、先生、パウルス・アンベルガーさんイタリアから戻ってき

てますよ、先生！ ……って……あれ、さっきまでここにいたの
に……先生？

ヨハン ごめん、ここだ。（衝立の後ろから出てくる）

コリナス 何だ、着替え中でしたか？

ヨハン うん、まあね。もうすぐ来るみたいだから。

コリナス へーめずらしい事もあるもんですね。

ヨハン そうか？

コリナス 大体、先生は服装にかまわなすぎなんです。だから恋人も出来な
いんですよ。

ヨハン おい、コリナス。

コリナス あ！ そうだ、先生、アンベルガーさん、もう、イタリアからグ
ラーツに戻っていますよ。一週間も前ですって。

ヨハン しょうがないな。

コリナス 手紙の他に、本も三冊頼んでましたよね。

ヨハン ああ。

コリナス 僕、取ってきましようか？

ヨハン ありがとう、コリナス。いつも助かるよ。

—馬車の音—

ヨハン おつ。

コリナス オルトルフアスさんいらつしやいましたね。

ヨハン ああ。

コリナス 何年ぶりなんですか？

ヨハン 六年五十九日二時間十分ぶりだ。

コリナス もうすぐ十一分になります。

ヨハン え？

コリナス 僕、ご案内しましょうか？

ヨハン コリナス、案内はいいから、アンベルガーのところへ…

コリナス はい。行ってきます！

ヨハン
頼んだよ。

コリナス、出ていく。ヨハン、コリナスが出ていったことを確かめて、大急ぎで衝立の後ろからドレスを出し、着る。カツラも被る。その扮装は、彼が、二十歳の時に謝肉祭の劇でした姿である。コリナスの「階段が急ですから気をつけて」という声が聞こえてくる。ヨハンは面白そうに身構える。ドアが開く。

ヨハン
やあ、オルトルファス……

ハインリヒ
兄ちゃん！（ヨハンの姿を見て）うわー！ ……ごめんなさい、間違えました。

ドアを開けて入ってきたのはハインリヒと天使だったが、すぐにドアを閉める。尚この時、ハインリヒは顔に痣を作り、足を引ききずつている。天使は息切れしている。

ヨハン　ハインリヒ？（あわてて追いかけ）ハインリヒ、兄ちゃんだよ。

劇の衣装だ。お祭りのなんだよ！

ハインリヒ　兄ちゃん？　兄ちゃん？　兄ちゃん！

ハインリヒ、天使、戻ってくる。

ヨハン　……ハインリヒ、どうしたんだ、この痣！（と言いながら部屋

の中に入る）お前、一体どうしたんだ！　どこに行ってたんだ。

母さん、心配して何度も手紙くれたんだぞ。

ハインリヒ　えつとね、あっちこっち、へへ……会えたね、兄ちゃん。

ヨハン　お前、まさか、兄ちゃんに会いに、ここまで？

ハインリヒ　へへ……んなこたない。ぼっくはね、歌手なのだー！

オルトルファス　いやあ、劇的な兄弟対面だな。（いつの間にか戸口にいる）

ヨハン　オルトルファス！

オルトルファス　おお、我が愛しのマリアンネ！

ヨハン　ガブリエル！

メストリン　マリアンネ？

オーベルドルファー

ガブリエル？

二人、走り寄って、抱き合う。オルトルファスはヨハンの神学校時代の友人。戸口には、この他に、メストリンとヨハンの友人であり、彼の学校の視学官（教師の監察官）で医師でもあるオーベルドルファーがいる。

ヨハン

メストリン教授！ オーベルドルファー！

オーベルドルファー

よう！

メストリン

元気にやっとなるかいな。

ヨハン

はい。

メストリン

いやあそれにしても、この素敵な弟さんには、びっくりしたわ。

大通りで「ぼ、ぼ、僕は月に行くー」って歌ったんや。

ヨハン

ええっ？

ハインリヒ

ぼ、ぼ、僕は月にいく、ぜったいいつかは月にいく。

メストリン

これはひよつとしたら危ないかもわからんと思って、後ついて

みたんが幸いしたわ。

オルトルファス

たちの悪い連中だったよ。ただのチンピラのくせに「正義の魔女狩り」だとき。

ヨハン

そうかありがとう。何て幸運な巡り合わせだろう……これぞ神の采配だ！

天使

ハインリヒ

（息を切らせながら）私の努力の賜なんですけどね。ありがとでした。（天使に）

ヨハン

ハインリヒ。お礼はちゃんと前を向いてしなさい。

ハインリヒ

（気がついて）ありがとでした。（メストリン達に）

オーベルドルファア

ハインリヒ君。顔の痣、そして足のおでき、見せてくれるかい。

（座らせて治療を始める）

ヨハン

すまない、オーベルドルファア。ハインリヒ、その歌は、もう

絶対、だめだよ。

ハインリヒ

何で？ 僕、歌いたい！

ヨハン

どんな歌でも歌っていい時代じゃないんだよ。

ハインリヒ

歌いたい、足痛いー！（泣く）

オーベルドルファア

あんな歌歌うとね、火焙りにされちゃうんだぞー。はい、泣かないで

メストリン　まさに世紀末やな。十七世紀はどんな世紀になることやら。

オルトルフアス　それにしても、ヨハン……（まじまじと見て笑って）懐かしい

なあ。それ、大学の時、謝肉祭の劇で着た衣裳じゃないか。

メストリン　なんや衣裳やったんか。

オルトルフアス　あのときお前、緊張しすぎて、劇が終わったとたんに熱だして、

それ着たまま3日も寝込んでたよなあ。

ヨハン　恥ずかしいわ。

オルトルフアス　あれはお前がまだ、学芸科にいた頃だから……。

ヨハン　二十歳よ。

オルトルフアス　六年も前になるのか。そういえばお前、あの頃牧師になりたい

って言ってたっけ。

オーベルドルファー　牧師？

ヨハン　そうよ。

メストリン　でも良かったやないか。牧師にならんで。こうして（『宇宙の神

秘』をとりあげて）最初の本も出版されたことやし。

オーベルドルファー　そう。

オルトルフアス　まったくすごいよなあ。『宇宙の神秘』

天使 『宇宙の神秘』が出たのか！

ヨハン どこが？

オルトルフアス え？

ヨハン どこがすごいって思ってくれた？

オルトルフアス いや、どこがといわれても。

ヨハン 遠慮しないで言ってくれよ。なんなら批判してくれてもいいんだ。

なあ、オルトルフアス。

オルトルフアス いや、それが……。

ヨハン それが？

オルトルフアス よくわかんなくて……。

ヨハン えっ？

オルトルフアス ……あ！ でも、ちよっと変わってて面白いと思ったのは、惑

星は太陽の周りを、楕円軌道をとってるってところ、あれは面

白かったな。

ケプラーの第一法則だ！

天使 ヨーん。

オーベルドルファー 俺はあれが面白かったなあ。ほら、太陽の周りを回る惑星を、

天使
ヨハン

重さを持った物体と考えると、太陽と惑星の間には、何か引き寄せ合おうとする働きがあるってやつ。天文学と物理学を合わせたところが画期的だよ。
未消化だが、万有引力の概念だ！
うーん……どうも君達は、僕の本の枝葉末節にこだわるくらいがあるな。

オーベルドルファー
メストリン
オルトルファス

枝葉末節？

天使

万有引力が枝葉末節！

ヨハン

そう、そんなことは突き詰めて考えなくていいんだよ。

オーベルドルファー

え？

オルトルファス

どうして？

メストリン

どうして？

天使

どうして？

天使

ニュートンは君のこの本読んでんだぞ。読んだニュートンが突き詰めて考えてんのに、書いた本人が考えなくていいって

メストリン
そりや一体、どういうことや？

ヨハン
ううん、例えば太陽を回る惑星の数が二十や百じゃなくて何故

六つなのか。

オルトルフアス
六つ？

ヨハン
そう。

天使
惑星の数は九つだー！ あー、教えてやりたい！

ヨハン
そこにどんな神の意志があるのか、一番大切なことは神が何故
そうしたのかという、神の声を聞くことなんだ。

天使
神の声！

オルトルフアス
神の声ねえ

オーベルドルファー
（同時に）神の声ねえ。

メストリン
（同時に）神の声ねえ。

ヨハン
六という数字はピタゴラス学派がいうところの完全数の一つ
なんだ。そして六つの惑星の間の空間は五つ。しかも、完全な
正立体の数も五つなんだ。

オーベルドルファー
正立体？

オルトルフアス
何で正立体がでてくるんだ？

ヨハン

だって、神は完全な世界のみを創造し得るんだよ。完全な対称立体は五種類しかなくて、惑星間の数も、五つなんだから、これは適合させよと言う神の声だよ。「私はお前の生まれる位置、運動する場所に完璧な幾何学的適合を授けた、意味のない生命の配置をしない」。偉大なる神は、人間にそのことを伝えるために、惑星にこのように意味ある配置を与えたもうたのだ、と僕は思う。

天使

偉大なのは神じゃなくてあなただ。「地球は重さのある物体で、重さのある物体は中心に到達しようとする。その力は距離が遠いほど弱くなる」こんな発想、人類史上、誰もしてないんだぞ、そこまで考えといて、最後に神様持つてきちゃうから、万有引力はニュートンまで、あと、百年も待たなきゃいけないんじゃないかー、あー、もつたいないー！

メストリン

うーん、とにかくこれは画期的やで！「神はなぜ、惑星の数を六つにしたか」いまだかつてこんな発想方法で惑星の距離と運動を捉えた天文学者はおらんからな。

オーベルドルファー

まさしく！

ヨハン

いやー、これも、繰り返し助言をいただき、印刷監督まで引き受けて下さった、メストリン教授、先生のお陰です。

メストリン

大したことないわ。お前さんが去年の夏から、半年もかかってあげた百枚以上の計算書に比べたら。あれは大した粘り強さやった。ほんまに感心したわ。

オーベルドルファー

まさしく！

メストリン

あんたはわいの大事な期待の星や。

オルトルファス

ヨハン！ 同期生として、こんなに嬉しいことはないよ。

オーベルドルファー

君の輝かしい未来は約束されたぜ。

ハインリヒ

（なんだか分からないけれど）兄ちゃん、万歳！

ヨハン

ありがとう。本当にありがとう。

天使

微分積分のない時代に、惑星の軌道計算を、わずか、一万分の三の誤差で計算してのける能力があつて、なんで、最後は神様なよ……

五人、抱き合う。

オルトルフアス
ところでヨハン。

ヨハン
なに？

オルトルフアス
あのさ、あの時の劇、すごく面白かったしき、俺を喜ばせようとしてくれたお前の気持ちは嬉しい。

ヨハン
よかった。

オルトルフアス
でね、もう、じゅーぶんだ、気持ち悪いから、着替えてくれ。

ヨハン
え？

メストリン
わいもいつ言おうかなあと思っと思った。

オーベルドルファー
まさしく。

ヨハン
分かった。

天使

ケプラーって、自分の書いた本の中に、万有引力やケプラーの法則があるって、それが世界初の発見だって、気づいてなかったんだ：天才っていうより、ただの間抜け？：

ヨハン、その場で着替え始める。

オルトルフアス
(ヨハンを見て) お前、何やってんだ。

ヨハン

いや、後ろの紐がこんがらかっちゃって。

オルトルフアス

まったく、あんな複雑な宇宙モデル考えるやつが、なんだって服の紐一つほどけないんだ。……あれ？

オーベルドルファー

お前こそ何やってんだ。(手伝い始める)

メストリン

ああ、もう、とろいやっちゃなあ。スカートに引っ掛かっているやないか。(手伝う)

なんだか、男三人でヨハンのドレスを脱がせてやっている

状態になる。丁度、ドレスの半分くらい脱げたところに、

コリナスが入ってくる。

コリナス

(非常に興奮して、飛び込んでくる) 先生！ アンベルガーさんが誰からの手紙を持ってきたと思います……！！

コリナス、ヨハンと三人の男達を見て、絶句して、持っ

ていた数冊の本を落とす。手紙を手に持ったまま硬直。

ヨハン

(着替えを続けながら) ありがとう、コリナス。コリナス、こちら僕の神学校時代からの親友でオルトルフアスだ。教授とオーベルドルフアーは知ってるよな、で、弟のハインリヒ……どうしたんだ、コリナス？

コリナス

……神学校時代から……(十字を切る)

オルトルフアス

(笑って) 誤解しないでくれよコリナス君。これは僕たちが学生時代にやった劇の衣装なんだ。紐が絡まったんで脱ぐのを手伝っただけなんだよ。

コリナス

はあ、

オルトルフアス

初めまして。オルトルフアス・ツエッケンだ。

コリナス

コリナス・ヴィルクマンです。本当ですか？

オルトルフアス

これでも美人のかみさんと二つになる子供がいるんだ。

コリナス

ああ、そうだ、それどころじゃない！ これ、この手紙、先生、

誰からだと思います？ ヒント、ヴェネチアからです。

ヨハン

まさか……ガリレオ・ガリレウスか？

コリナス

正解！ 先生がアンベルガーさんに届けてもらった「宇宙の神

秘」の感想ですよ、きつと！

メストリン うひょー！ はよ、読んでな。

ヨハン

（急いで封を切って）「学識ある我が博士、貴下がパウルス・アンベルガーを通して送付してくださった御本、数時間前に受け取りました。他ならぬこのアンベルガー氏がただちにドイツに帰国すると言っておられますので、すぐに謝意を表します。」

コリナス

なんだ。お礼状だけだ。まだ、読んでないんだ。

ヨハン

序文だけは読んでる。「これまでのところ、序文に目を通したのですが、御本の内容の一般概念を得ました。」

オルトルファス

序文の一般概念？

コリナス

コペルニクスの宇宙体系を支持する先生の論法の略述ですよ。

ヨハン

「真理の学問において、真理の友である僚友を得て、私はこの上もなく幸せ者であると思っています。」

コリナス

先生のことを真理の僚友！

ヨハン

貴下の御本の中に、もっとも賞嘆すべき事を発見するであろう喜びは、私が何年も前に（声が大きくなる）コペルニクスの教えを採用しておりますだけにますます大きなものとなるでしょう！」

メストリン よっしや！ ああいう男がコペルニクスの信奉者や云うこと

を公表してくれたら、やりやすくなるで。

ヨハン

待てよ「私はコペルニクスを支持する論文を書いています、それらを公の場に持ち出す気はありません。」何故だ？ 「我らが師、コペルニクスの運命を思うと、恐ろしいのです。……私はこのことを隠し続けることになりましたよ……一五九七年八月四日 ガリレオ・ガリレウス」

コリナス

これはつまり……

ヨハン

よし、すぐに彼に手紙を送ろう。

オルトルファス

ちょっと待てよ、一体、なんて書くつもりなんだ。

ヨハン

決まっているよ、勇気を出して、真実を言おうってことだ。

オルトルファス

ヨハン！

ヨハン

今や、ヨーロッパ中に、コペルニクスの支持者はたくさんいるよ。

オルトルファス

ヨハン！

ヨハン

そういう人たちが信念を持てば、真実は普遍になる。

オルトルファス

(ヨハンの言葉を遮りながら) ヨハネス・ケプラー！

ヨハン どうしたんだ？

オルトルフアス お前、僕たちが何のために今日ここにきたと思ってるんだ。

ヨハン 何のため？

オルトルフアス 自分の足の下に薪の束が積まれている時に、ヴェネチアの男の心配している場合か！

ヨハン 薪の束？ その薪の縛り紐の札はなんだい？ 僕の財政困難、

それともフェルデナント大公のルター派弾圧？

オーベルドルフアー もちろん、両方だ。

ヨハン そうか、それで三人そろってきた訳か。僕を、改宗させるために。

オルトルフアス とりあえず、そこからだ。

ヨハン コリナス、ありがとう。今日はもう帰っていいよ。

コリナス 何故です。

ヨハン これから真理を学ぼうとしている若者が聞く話じゃない。

コリナス 確かに僕はまだ十六のヒョッコです。でも数学と天文学を……

科学を、愛しています。お話の邪魔はしませんが、聞く権利はあると思います。（部屋の隅に座る）どうぞ。

ハインリヒ (真似て) どうぞ。(隣に座る)

オルトフアス ヨハン、まあ座れ。

オーベルドルファー フェルデナント大公はたぶん今年中にグラーツ中のプロテスタント学校を閉鎖するだろう。

ヨハン え!?

オーベルドルファー 落ち着け。この情報はまず間違いない。君がルター派を捨てられないなら、俺は視学官という職務上、君のことを、報告しなきゃならない。

ヨハン はつきり言ったらどうだい。密告って。

オーベルドルファー 少しは自分のしることを考えろ。それでなくたって、君は生徒に体罰を与えない怠慢な教師として視学官仲間から目を付けられているんだ。

オルトフアス ヨハン! お前も知ってるだろ、ほら、イエズス会のヘルヴァ

ルト・フォン・ホーエンブルク。あの気さくな哲学者で科学者のパトロン。あの人が今回のお前の本を気に入って、イエズス会に入るんなら、優遇するって言ってるんだ。

ヨハン ホーエンブルクが?

メストリン

そや、あのホーエンブルクさんや。

オルトルファス

イエズス会、入るよな、ヨハン？

ヨハン

僕の、父は、僕が子供の頃、ルター派でありながら、カトリックの軍隊に入ったんだ。その恥知らずな行いのために、僕ら一家がどんなに肩身の狭い思いをしたか……住み慣れたヴァイルの町を追われて、レオンベルク、エルメンディングゲン、又レオンベルクと、転々として……学校にも禄に行けず……僕は、父のような、あんな恥知らずな真似はしたくない。僕は、グライツで戦うよ、例えたった一人のルター派になったとしても、フェルデナント大公のような、政治をやるには頭の悪すぎるような連中に、屈服はしない。

オルトルファス

おい、おいそんなにムキになるなつて。

オーベルドルファー

ヨハン、君が屈服しないのはわかった。しかしもう屈服だらけだ。

ヨハン

何？

オーベルドルファー

（「宇宙の神秘」を取り上げ）この本、君の記念すべき輝かしい処女作「宇宙の神秘」の、この最初のページはなんだ、この気

持ち悪くなるような献辞は。

ヨハン

あ！

オーベルドルファー 「輝かしく寛大にして高貴篤実なる方々に。すなわち、ヘルベルシュタイン、グッテンハークの男爵、皇帝陛下と高貴この上なきオーストリア大公フェルデナント殿下！」

ヨハン

あ！

オルトルファス お前は昔っから、理想と志の高い優等生だったよ。でもさ、その割に意志も弱かった。

オーベルドルファー 「極めて寛大な人士、温厚にして好意ある我が殿下達に、敬礼と忠誠を捧げます」……嫌みかと思うくらい卑屈だよ、君は。

ヨハネス・ケプラー。だから俺達も少しは安心なんだ。

ヨハン

……

メストリン 世紀末や。どんな歌でも歌っていい時代やない。今の世の中、社交辞令は大事やで。天文学みたいなことやって暮らしていいと思うたら、どうやったって、貴族の保護がいるんや。誰かてやってるこっちゃ。

ヨハン

先生……僕は確かに、卑屈です。暴力と、お金の前には、簡単

に膝を折ります。でも、それでも、改宗だけは出来ません……
僕は、父に似て、意志の弱い、卑屈な男です。それでも、僕は
父ではない。

メストリン
（他の二人に）こりや改宗は無理やな。

オルトルファス
ま、ほぼ予想通りですね。

オーベルドルファア
作戦は次の段階に入ったな。

オルトルファス
ところで、ヨハン、お前、印刷屋の未払い金はどうするんだ。

メストリン
確か、三十三フロリン。

オーベルドルファア
それにもし学校が閉鎖されたら、どうやって生活していくんだ
ろうなあ。

ヨハン
そ、それを言われると……（うなだれる）

三人、「やったね」という感じで笑い、目で合図。

オルトルファス
がっかりするな、方法がないわけじゃない。

ヨハン
返せる当てのない借金はしたくないんだ。

メストリン
返さんかてええんや。

ヨハン
え？

オーベルドルファー
しかも借金でもない。もらえるんだ。

ヨハン
お金を？ そんな旨い話が……

メストリン
あるんや、それが、そんな旨い話が……

ヨハン
な、なんか、みんな、変だよ。

オルトルファス
ヨハン、結婚しよう。

ヨハン
えええー！！！！

コリナス
やっぱりあなた方は……

メストリン
何考えてんねん！ 相手は女や、女！

オーベルドルファー
君も会ったことがあるだろう。ほら、ゲオルク・ハルトマンの

とこの結婚式で挨拶した、青いドレスの、

ヨハン
ババババ、バルバラ、ミユラーさん？！

オーベルドルファー
やっぱり覚えてた。

ヨハン
だだだだ、駄目だよ、あああ、あんなきれいで美人で美しい人

が、ぼぼっ僕なんかと……

オルトルファス
ほう、きれいで美人で美しい人ねえ。

ヨハン
そそそそれに、オーベルドルファー、きき君だって覚えている

オーベルドルファー

だろう、きき君が紹介してくれた時、あちらのお父様が……

(メストリンに帽子とステッキ代わりに定規か教鞭のような物を渡し)これはこれは、ヨプ・ミュラーさん、お久しぶりです。

メストリン
え？ あ？ わい？

オーベルドルファー

(オルトルフアスにドレスを渡し)こちらのお美しいご婦人は、お嬢様でいらつしやいますか。

オルトルフアス

俺かい！ 初めまして。バルバラ・ミュラーでございますことよ。

オーベルドルファー

(おいおい)えー。ミュラーさん、こちら、僕の友人で、ヨハネス・ケプラー。プロテスタント学校で数学と天文学の教師をしております。(メストリンの後ろで)それはそれは。ではお宅もルター派ですか？ 家も親の代からルター派でしてね。以後よろしくお願いいたしますよ、先生。

ヨハン

オーベルドルファー

しゃべるな。失礼ですが、こちらのお嬢様は、これほど美しい方でいらつしやいますし、もうどなたか決まったお相手がございますよね。(メストリンの後ろで、メストリンを人形とし

てミューラーの役をやらせながら）いや、それが、もう二十三になるんですが、良い方が見つからなくて苦勞いたしております。（オーベルドルファーとして）それはそれは。こちらのヨハネス・ケプラーは、まだ二十五歳ではありませんが、将来を囑望された、才能あふれる天文学者です。（メストリンのうしろで）ほう。失礼ですが、教師といわれますと、俸給の方は、その、大變でしょうね。

ヨハン

は、はい。百五十フロリンでは、たいへん大變です。

オーベルドルファー

（メストリンの後ろで）月収百五十ですか。

ヨハン

いえ、年収百五十なんです。

メストリン

（突然）バルバラ、ほな、行こか。

オルトルファス

はい、お父様。

オーベルドルファー

………

ヨハン

あー！ 僕はあの日のことは一生忘れないー！！ 僕の恋は

あの一瞬でおわったんだー！！

オルトルファス

ほうううううう、恋ねえエー。

ヨハン

とにかく！ そんな話は、もう止めにしてくれ！

オルトルフアス　まあまあ。(なだめる)

メストリン　ヨハン、ミユラーさんと話は付けてきた。明日お前が挨拶に行

って決まりや。

ヨハン　えー?!

オルトルフアス　あちらは、一万フロリンの持参金と、二人のための家まで用意
してくるって訳さ。やったな、ヨハン、美人で金持ちの嫁さ
んだぜ、この野郎!

ヨハン　そそそ、そんな、な、なんで?

オーベルドルファー　あちらとしては、式は一日でも早い方が良いつて言つてたぜ。

お目どう!

ヨハン　あああ、あり得ない! 君たちはあちらに何を言つたんだー!

メストリン　いや、なに、向こうの弱みにつけ込んだだけやがな。

ヨハン　弱み?

メストリン　あのな、あの別嬪さん、まだ二十三なんやけどな、結婚、今度
で三回目やねん。

ヨハン　はい?

オルトルフアス　いや、お前はそんなこと気にしないとと思うけどな、彼女、最初

に十六で結婚したんだけど、なんか、夫が早死にするタイプみたいなんだ。

ヨハン
えー？

オーバードルファア
でね、君はそんなこと気にしないと思うけど、持参金の一万フロリンは彼女の最初の夫の遺産なんだ。で、家の方は、二番目の夫の遺産。まさか、気にしないだろう、君は。

ヨハン
えーと……、え？

メストリン
それとな、お前はそんなこと気にせんと思うけどな、彼女な、最初の夫の連れ子がおんねん。レギーナいう、七歳の女の子や。かわいい子やでー。

ヨハン
こどもー?!

メストリン
この子供も一万フロリンの遺産を相続してんねん。ええやないの、なあ。

オルトルファア
いやあ、いい話だ。

オーバードルファア
願ったり、叶ったりだ。

ヨハン
あ、ああの……ちよつと考えさせて下さい。

オルトルファア
ちよつとだぞ。

オーベルドルファアー 一、二、三。

メストリン ヨハン、もう、ええやろ。

ヨハン いや、まだ。

オルトルファス なんだ？ 何か、彼女に不満でもあるのか？

ヨハン とんでもない、あのあの、あんな素敵な人が……

オーベルドルファアー だよなあ、良かったなあ、君の恋が実つて。

オルトルファス 本気で惚れた女なら、過去のことなんか忘れてやれ、な。

ヨハン ああ、あれ、はい？

メストリン いやあ、よかった、よかった。

オーベルドルファアー じゃ、明日迎えにくるから。

ヨハン え？

オルトルファス めかしこんどけよ、色男！

ヨハン はあ……

「じゃあな」「おめでとう」「ひゅーひゅー」と、三人出て行く。

戸口を出てから三人固まり。

オルトルファス

本当に大丈夫かな、あいつ。

オーベルドルファー

このままだったら、命の保証はない。フェルデナント大公は元々狂信的なカトリック信者だったが、近頃はますますひどくなってる。ほとんどプロテスタントを憎んでいると言ってもいい。

オルトルファス

早く改宗させないと……

メストリン

それだけやない。印刷屋が、売れ残った『宇宙の神秘』、買い取れ言うてきてんのや。

オルトルファス

何冊くらい？

メストリン

二百冊。もう、わいかて、無理や。

オルトルファス

大丈夫ですよ、先生。ヨハンはきつと結婚します。改宗もしますよ。

オーベルドルファー

その点はヨプ・ミュラーに確認をとりました。もしもルター派弾圧が始まれば、彼は、一も二もなく、家族全員を、即座にイエズス会に改宗させるそうです。

メストリン

ヨハンは家族の強い反対にあったときに抵抗できる男やない。

オルトルファス

オーベルドルファー

三人

舅はんが、ちよいと怒鳴つたら「ごめんなさい」言うて、改宗するに決まっとる。……そうならな、あかんのや。

はい。

なんとしてでも、結婚させなくては……

うん……

三人、去る。

ハイリンヒ

兄ちゃん、結婚するの？

ヨハン

……。

ハインリヒ

(コリナスに) 兄ちゃん、結婚するの？

コリナス

そうですよ。

ヨハン

コココ、コリナス！

ハインリヒ

ばんざーい！すごいや、兄ちゃん！

コリナス

御結婚おめでとうございます。新しい住所が決まりましたら教

えて下さい。是非質問に伺わせていただきます。

ヨハン

コリナス、君は僕を軽蔑するんだね。

コリナス 何故ですか？

ヨハン 僕が、お金のために、結婚しようとしているからだよ。

コリナス 結婚後、先生が奥さんとその持参金をどう扱うかによつては、軽蔑せざるを得ないかもしれませぬ。しかし、現在の先生の切迫した経済状況を考えると、結婚の理由のみにおいて軽蔑に値するとは思われませぬね。

ヨハン ……ありがとう……君って大人だなあ。

ハインリヒ 僕ももう大人だよ、兄ちゃん。

ヨハン そうだね。

ハインリヒ ねえ、僕もう、二十三なんだよ。大きいんだよ、ねえ、もう月に連れて行ってよ！

コリナス えー、そんな約束したんですか？

ヨハン うん……もう、うんと小さい時にね。

コリナス いいなあ、ねえ、ハインリヒさん。僕も連れて行ってもらつていいですか。

ハインリヒ どうしよつかなあ。

ヨハン (とても困る) コリナス。

ハインリヒ　　いいよね、兄ちゃん。あ、そうだ、兄ちゃん。お嫁さんも連れて行こうー！

コリナス　　そりやあいい！

ハインリヒ　　そりやあいい！　それから、あの人も連れて行こうー！

ヨハン　　誰だい？

ハインリヒ　　あの人といえばあの人のだー！　あの、歌いたい歌の歌えない人なのだー！

ヨハン　　それはお前のことだろう。

ハインリヒ　　ちがうよー！　僕は歌いたいときに歌うモン。そこだー、ビシッ！

ヨハン　　え？

コリナス　　ガリレオ・ガリレウス！

ハインリヒ　　その歌手だー！

天使　　ガリレオ、歌えない歌手。

ハインリヒ　　そのとおり！

ヨハン　　ガリレオ・ガリレウスも、一緒に、月に？

ハインリヒ　　（歌う）ぼ、ぼ、ぼーくは月にいくー、ぜったいつかは月に

いくー！

ヨハン

：コリナス。僕が、ガリレオ・ガリレウスに、一緒に月に行こうと言ったら、君は僕を軽蔑するかい？ お金のために、貴族に卑屈にへつらい、お金のために結婚までしようとしている卑怯な男が、ガリレオに「一緒に真理を公言しよう」なんて理想論をぶち上げたら、君は、

コリナス

先生。いい加減にして下さいよ。そんなに僕に先生を軽蔑させたいんですか？ いいですよ、して上げますよ、僕は先生を軽蔑しますね。もしも先生が、自分のことなんか例え棚に上げてでも、その度はずれた理想論を言わなくなったらね。

ヨハン

コリナス：…君って、本当に大人なんだね。

ハインリヒ

（歌う）ぼ、ぼ、ぼーくも、もうおとなー、もうおーとーなー！

暗転

舞台のある一角に、天使が浮かぶと、手紙を読み始める。

天使

「我が最も優秀なる人文主義者、ガリレオ・ガリレウスへ。で

きることならば、かくも優れた精神を有しておられる貴方には、別の立場をとっていただきたかったと思っております。」

舞台の別の一角に、ヨハンとバルバラが浮かぶ。

これ以降、ヨハン達と手紙を読む天使が交互に現れる。

ヨハン

バルバラ、レギーナは素晴らしいよ。彼女、まだ七歳なのに、数学を理解する能力がある！ 僕に似ているところがあるんじゃないかなあ。

バルバラ

あなたに似ている訳ないでしょう。血が繋がってないんだから。いや、絶対に似ている。きっと何か共通の星があるんだ。そうだ、レギーナの誕生の星を見てみよう。

バルバラ

星って言えば、あなた、すごいよ。あの英雄ヴァレンシュタイン將軍から星占いの依頼が来ているの！ スチリア一番の星占い師に、運勢を占って欲しいんですって。

ヨハン

バルバラ、そういうのは断ってくれ。天文学者は星占い師じゃないんだ。

バルバラ　えー！　違うのー？

ヨハン　……違うんだよ。

バルバラ　だってあなた、今だって、レギーナの星を見るとか言ってたじ

やないの。なんでえ？

ヨハン　バルバラ、君には分かって欲しいんだ。僕が生誕の星を見るの

は、その子供が何故そこに生まれ、どういう神の意志で、ある性質を持って生まれてくるかが知りたいからなんだ。なぜ子供は、似たくもない親にでも似てしまうのか、同じ親から生まれ

ながら、何故ある人間は陽気で、ある人間は暗いのか、今の科学では何も分からない。しかし、それを説明させそうな唯一の希望が、その人間の生まれた日、生まれた時間の星の配置にあると僕は考えているだけなんだ。僕は星が、生命の性質を刻印するという法則を探しているのであって、占いをしているわけじゃないんだ。

バルバラ　えー！

ヨハン　星に運命の決定権はない！　そうでなければ、神は人間に自由

意志を授けるはずがないんだ。

バルバラ　もう、何言ってるんだか、分かんない！

ヨハン　星占いはやらないって事だよ。

バルバラ　どうして？　今までだって、やったことあるじゃない。

ヨハン　あれは仕事だ。天文暦を作ったときには、何か予言めいたことを書き込まなきゃならない決まりになっているから、

バルバラ　だって、それが当たったんだから、やっぱりあなたは星占いの才能があるのよ。ほら、トルコ人の襲撃とか、大寒波到来とか！

ヨハン　予測と分析に基づく偶然なんだよ、バルバラ。

バルバラ　なによ、じゃあ、將軍の星占いを断るって言うの？

ヨハン　もちろんだ！

バルバラ　二十フロリンも出してくれるのよ！

ヨハン　僕の信念は、変わらないよ。

バルバラ　ヨハン！

ヨハン　でも、二十フロリンはいいお金だね。

バルバラ　やってくれるのね！

ヨハン　うん。……ああ、僕は何て意志が弱いんだろう。

バルバラ　もう、あなたたつてば、優しいんだから。

ヨハン ……僕ってば、優しいのか？

バルバラ ヨハン、お金は必要よ、だって、あたし達、子供ができたんだもん。

ヨハン 子供？ 僕たちの？ ほんとに？

天使 「貴方は世間の無知の前には巧妙に引き下がるべきだ、という警告を強調なさいますが、人々はそれほど無知であるとは思われません。現在すでに、多くの数学者達がもはや地球の運動を、目新しいものでは無くならせつつあります。人々を信じ、この巨大な企てを私たちの努力で、共にその目的地まで、徹底的に押し進める努力をしませんか？」

ヨハン 今、よりもよって今、なぜ、学校が閉鎖されるんだ、オーベルドルファー、子供が産まれるんだ！ 僕は職を失うわけにはいかないんだ！

天使 「ガリレオ・ガリレウス、その気になれば、貴方は貴方の真理

の僚友達を助けることができます。彼らに、貴方の同意という慰めを、貴方の権威という保護を与えてやって下さい。」

ヨハン

オーベルドルファー、君は藪か！ どうしてお産に二日もかかるんだ！ 彼女のあの苦しそうな声に、僕はもう耐えられない！

母カテリーナ

うるさいよ、ヨハン。お前の女房は耐えてんだよ。どうせ何にもできないんなら、せめて泣き言はよそでやつとくれ！

オーベルドルファー

お母さんの言う通りだ。ヨハン、正直言って、非常な難産だが、君にできることは、きつぱり、何も無い。父親はいつもみんな、そうやって子供と妻の心配をしながら、待っているしかないんだ。せめて祈ってくれ。

ヨハン

父親はみんな？ みんなじゃないよ、オーベルドルファー。

天使

「信念を持って下さい、ガリレウス！ そして、打って出て下さい。ヨーロッパの傑出した数学者で、私たちに賛同する者は大勢出てきます。真理の力とはそういうものだからです。」

オーベルドルファー
ヨハン、男の子だよ。

ヨハン
バルバラ！

バルバラ
あなた、この子の名前は、ハインリヒにしようと思うの。あたしの大好きなお兄さんの名前なのよ。あなたのお父様の名前もそうなんでしょう？ いいわよね？

ヨハン
バルバラ、その名前は……その名前を、父は、僕ではなく、弟に付けたんだ。

母カタリーナ
「長男だ、俺の長男だ、一緒に戦場で活躍しような」って、あの人は、喜んでいたよ。

ヨハン
（突然星座表を見る）土星は……外れている。火星、大丈夫だ。水星、第七宮、金星……完璧だ！ バルバラ、素晴らしいよ！ この子はすごく素敵な子だよ！ 賢くて、敏捷で、優しく、勤勉な、素晴らしい子供になるよ。大丈夫だ、この子はハインリヒ以上のハインリヒになる。バルバラ、僕達が育てるんだ。僕達がハインリヒを育てるんだ！

天使

「ガリレオ・ガリレウス、科学という真実を写す鏡のことを考えます時、私たちの仕事は、発見や発明の競争ではなく、只ひたすら、全人類と、人類の子供達に仕える仕事なのだと思えてなりません。」

バルバラ

ハインリヒ、ハインリヒー！！！！

ヨハン

オーベルドルファー！ 君は藪か！

オーベルドルファー

無茶言うな！ 脳膜炎だ、もう、手の施しようがない。

ヨハン

二ヶ月だぞ、まだ、たった、二ヶ月で……神よ……！！

天使

「こんな風に書くと、私がかたいような人間であると思ひ込んでいるとお考えになるかもしれませんが、そうではありません。この世界という舞台の中で、私は取るに足らぬ、無力な個人として生きています。」

ヨハン

できない？ 埋葬、できない！？ どういうことだ？

墓堀 旦那、すみませんがねえ、ルター派の葬式は禁止されています。
で。

ヨハン この子は、たった二ヶ月しか生きてなかったんだ、まだ、カトリックやプロテスタントが何かも分かってなかったんだ。

墓堀 だって、旦那。ルター派の洗礼を受けてますでしょう。

バルバラ

だから、だから、あたしが言ったじゃない。この子が生まれる前にイエズス会に帰依しようって！ 父さんはとつくに改宗したのに、あなたがあんなに反対するから……！

墓堀 お気の毒です奥さん……あの、全くできないって訳じゃ……罰金さえ払っていただければ……

ヨハン 罰金？ グラーツでは、子供を埋葬すると罰金を取られるのか！

墓堀 旦那、ルター派はお止めんなった方が、

ヨハン いくらだ。

墓堀 十フロリン。

天使 「貴方の著作を出版する上で貴国イタリアが貴方に不利のよう

に思われるようでしたら、我が国においてなら、多分出版は可能になると存じます。私も喜んで協力いたします。」

オーベルドルファー

ヨハン！　ヨハン、今すぐこの町を出るんだ！

ヨハン

僕はここを離れる気はない。息子の墓を放って行けるはずがないじゃないか！

メストリン

ど阿呆！　悲劇気取って、何様や！　赤ん坊の一人や二人、どこの家かて、死んだらわい！　このうえ自分まで死なせてどないすんねん。

ヨハン

え？

オルトルファス

ヨハン、グラーツのルター派の教師と牧師は、七日以内にスチリア全土から追放される。いつさいの例外なしだ。残っている者は一人残らず死刑！

バルバラ

ああ！

メストリン

ヘルヴァルト・フォン・ホーエンブルクが真つ先に知らせてくれたんや。そういう友達がイエズス会におるいうことを感謝せい、ぼんくら！

オルトルフアス

はったりじゃない、フェルデナント大公はやるぞ。

オーベルドルフアー

全く！ 君が宗教に関して、ここまで頑固だったとは誤算だったよ！

バルバラ

ヨハン！

オーベルドルフアー

奥さん、すぐに、荷造りを。

バルバラ

はい！

オルトルフアス

さ、これ、これにサインして。

ヨハン

なんだ、これは？

ヘルヴァルト

お前はこういうことには気が回らないだろう。これは、スチリアからの現金持ち出しにかかる税金が半額になる申請書だ。ヘルヴァルトが作ってくれたんだ。

ヨハン

ヘルヴァルトが？

オルトルフアス

失くすんじゃないぞ。

ヨハン

ヘルヴァルト、あなたは……

メストリン

ヨハン、お前な、わしのところで一旦準備したら、ボヘミヤに行

け。

ヨハン

ボヘミヤ？

メストリン

ああ！ もう、とろいやつちや！ プラハのティコ・ブラーエのところや。お前の『宇宙の神秘』を気に入って、共同研究者として来てくれてゆうてたやないか。

ヨハン

ああ、そういえば……

メストリン

ティコ・ブラーエゆうたら当代一の天体観測家や。観測の精密さやったら、多分世界一や。同じ天文学者とはいえ、向こうはデンマークの大貴族。うまくいかん事もあるやろけどな、辛抱しいや。何せあいつの持つとる天球儀一つでお前の年収の八十年分や。その器具とデータを利用させてもらわん手はない。

ヨハン

先生……

メストリン

ほら。ちやつちやか動かんかい！

オルトルファス

ヨハン、ヘルヴァルト・フォン・ホーエンブルクが、どこにしようと、必ず君の著作は送ってくれと。君の仕事を尊敬していません、と。

ヨハン

分かった。僕はあなたのお陰で、カトリックを憎まずにすみますと、彼に、そう伝えてくれ。

オルトルファス

……うん。

オーベルドルファー

ヨハン、奥さんとレギーナちゃんを馬車に乗せたよ。

ヨハン

すぐ行く。ありがとう。

天使

「ガリレオ・ガリレウス、私は人間の理性というものを信じています。いつの日か、人類は宇宙空間に適合した帆船を作り出すことでしよう。そうすれば、見渡す限りの虚空を恐れぬ人々が、たくさん現れるでしょう。その時の、勇敢な宇宙の旅行者達のために、私たちは水先案内人として、地図を作っておこうじゃありませんか。私は月面の地図を作ります。ガリレオ、あなたは、木星の地図を作るのです。……一五九七年十月十三日グラーツにて ヨハネス・ケプラー。」

暗転

第四幕 宇宙の調和

メストリンが浮かび上がる。

(手紙を読む)「親愛なるメストリン教授、貴方はまさに私の最初の父でありました。しかし、残念ながら、ティコ・ブラーエは、私の第二の父には、とうてい成り得ません。最初、彼が私を、惑星の中でも最も難しいといわれる、火星軌道の計算の担当者に指名したときは、有頂天になりました。ところが、彼は、火星の観測データを、私にはいつさい見せてはくれないのです。先生、私は、ブラーエの共同研究者として招かれたものと思っております。けれど、そうではなく、ただの道化だったのです。私はもう、耐えられません。故郷に戻り、数学の教師になりたいと思えます。」…こないな気いの弱い手紙、寄こしてきたんが、ほんの一年前…。ヨハン、わいにはちよびいーとだけわかるで。お前を苛めたブラーエはんの気持ちがな。当代一とはいえ、ただひたすら精密な観測を続けただけやったブラーエにとって、お前の、その、大胆な発想力と、ずば抜けた計算能力が、どんだけ妬ましかった事やら。(別の手紙を読む)

「先生、私は、我が師、ティコ・ブラーエを誤解しておりました。彼は、その死の床で、彼の後継者として、息子でも、娘婿でもなく、たった一八カ月仕事を共にしただけの私を指名して下さったのです。『自分が一

生をかけてきた仕事を、無駄だったと思わせないでくれ。』彼は私にそういう残し、私の手をしっかりと握り締めながら、神に召されました。先生、私は、この、十一月には、正式に、ティコ・ブラーエの後継者として、皇帝付きの帝国数学者に任命されることでしょう。三十にして皇帝付き帝国数学者。」えらい出世やなあ。（『新天文学』の本を見ながら）そしてこの『新天文学』また、どえらい本を書きよったもんや。ブラーエの観測データを元に、火星軌道を、わずか十七ヶ月で、データと二分の差で計算。七十回にわたる計算のやり直しと、九百枚に及ぶ計算書。しかもその計算から出る一定の誤差から、惑星が楕円軌道を取ること、そのスピードも一定ではないということを、定式化しよった。宇宙は『新天文学』の出版と同時に、その形を変えてしまっよった。けど、そんなことは相変わらず、お前にとっては枝葉末節なんやろな。ヨハンお前はほんま化けモンや。

メストリンが消え、天使が浮かび上がる。

天使　　化けものね……。さて、当のヨハンは、『新天文学』を出版した

年、一六〇九年、学生時代に書いた、もしも人間が月に行ったら……というレポート、あれに『ケプラーの夢』というタイトルを付けて書き直し、空想小説として発表しました。主人公の青年ドゥラコトウスが、母親の呼び出した精霊の助けを借りて月に行く話で、ニュートン力学発表以前ですから、慣性の法則も何もなかった時代に書かれた、世界初の月世界旅行小説です。これが粗筋だけの物だったにもかかわらず、評判を呼び、回覧と写しだけで、翌年にはイギリスまで渡り、ミルトンの『失樂園』にまで取り入れられ、後にはあの『月世界旅行』を書いたSF作家、ジュール・ベルヌも読んでいたそうです。まあ、その発想たるや、確かにこいつは化けモンかもしれないと思えますよ。月の天文学はもとより、月に行く方法に至っては、「大砲で空高く打ち上げ」られるようなものだから、「ショックが四肢に分散されるようにしなければならない」とか、宇宙空間では、「飛行の第一段階を過ぎると、それ自体が目的地向かって自然に進む」とか、おいおい、君はニュートン力学も、慣性の法則もなかった時代に何だかってそんなこと言えるんだって感じ

ですね。でも まあ、この他愛のない空想小説が、結構大変なことになるんだな、これが。さてと、ハインリヒ君は元気です。レオンベルクの町で母親と二人っきりで暮らしながら、兄ちゃんがいつか月へ連れて行ってくれるのを待っています。あ、それに答えたかったんでしょかねえさっきの小説。

一六一六年、（ヨハネス・ケプラー四十五歳）

レオンベルク。ハインリヒと母カテリーナの家。テーブルと椅子、ソファが置いてある程度の簡素な室内。大きなヨハンの旅行鞆が置いてあるのだけが目立っている。ヨハンがハインリヒの洗濯物を持って入ってきて、椅子に座ってそれを畳み始める。

ノックの音がする。

ヨハン
（警戒して）誰だ？

マルガレーテ・声

兄さん、あたし。

ヨハン
(ドアを開ける)

妹のマルガレーテ(三十七歳)が入ってくる。

ヨハン
マルガレーテ。

マルガレーテ
兄さん(抱き合って)……いつ、レオンベルクに？

ヨハン
五日前だ。心配したよ。一人？

マルガレーテ
あの人に来られる訳ないでしょう。牧師が、魔女の家になんて！

ヨハン
そんな言い方は止め。

マルガレーテ
じゃ、どんな言い方があるって言うの。母さんは我が侘なのよ。いつだって自分が一番正しいとっていて、誰に反感買われようが、平気。薬草作りだって、何度も止めてって言ったのにお構いなしで、挙げ句の果てが、これよ……！

ヨハン
……落ち着いて。

マルガレーテ
……恐かったわ私の家で捕まったのよ、母さん。役人は容赦しないし、母さん、喚きちらすし、子供達は泣き出すし……。窓の

植木鉢、二つも割っちゃったわ……

ヨハン

マルガレーテ：大丈夫、濡れ衣だよ。母さんが魔女じゃないってことは僕達が一番よく知っているじゃないか。お茶、入れようか。

マルガレーテ

いらぬい。すぐ帰るから。ハインリヒ兄さんは？

ヨハン

寝ている。

マルガレーテ

呑気なものね。

ヨハン

疲れているんだ。今度のことは、ハインリヒには難しすぎる。

マルガレーテ

あたしにだって難しいわよ。それ、(洗濯物)

ヨハン

ハインリヒの。溜めちやたらしくて。

マルガレーテ

かして。そんな畳み方じゃ、却って皺になっちゃう。

ヨハン

このごろじゃ、僕だってやってるんだけどな。

マルガレーテ

再婚しなさいよ。バルバラだって、許してくれると思うわよ。

ヨハン

お葬式の時は、すまなかつたね。僕は、何もできなくて。

マルガレーテ

無理ないわよ。二人一遍だったんだもの。バルバラもだけど、フリードリヒちゃん、まだ、二つだったのに……もし家の

子たちがそんなことになったら、あたし、一生母さんを恨む！

ヨハン

どうしたんだ、マルガレーテ。バルバラもフリードリヒも発疹チフスで死んだんだ。病気だよ。今度の事とは、関係ないだろう。お前、なんだか、ごっちゃにしているよ。

マルガレーテ

兄さんは知らないのよ！ プラハみたいな都会じゃないのよ、ここは。この間だって、教会の路地でおしっこしていた女の子が、「教会の近くでそんなことができるのは魔女だけだ」って、男達に殴り殺されたのよ。

ヨハン

まさか……

マルガレーテ

兄さんはいいわよ、男なんだから。あたしは、魔女の娘はやっぱり魔女なんじゃないかって疑われているのよ！ うちの子達だって、いつ、誰が何を言い出すか……

ヨハン

マルガレーテ。……少なくとも裁判がある。証拠を集めて母さんの無罪を証明しなくちゃ。

マルガレーテ

茶番だわ。魔女裁判で無罪の証明なんて……この教区だけで、今年に入ってもう、二十人も火焙りが出ているのよ。母さんのとばっちりなんてごめんだわ！

ヨハン

マルガレーテ、母さんは魔女じゃない！ この世に魔女なんて

いない。これは陰謀なんだ。母さんはただ、母さんの貸した小金のことで、ガラス屋のウルスラと喧嘩をしただけなんだ。それなのに、あのウルスラの兄貴、宮廷理髪師のクロイトンが、酔っぱらって母さんを公会堂に呼びだし、ウルスラの病気は母さんの呪いだから、その呪いを解いて病気を治せと、母さんの胸に剣を突きつけて迫ったんだ。母さんは、剣を突きつけられともひるまなかつた。反対に、魔女でもない自分に魔法を使わせようと強要したクロイトンを教会裁判に訴えると脅して、堂々と公会堂を出てきた。

マルガレーテ

ところが、友人達の前で恥をかかされたと思ったクロイトンは、その場にいたアインホルト判事を抱き込んで、母さんを被告とする魔女訴訟を起こした。

ヨハン

そうだ、それが真相だよ。マルガレーテ。馬鹿馬鹿しいじゃないか。

マルガレーテ

違うわ、兄さん。それだけなら、こんなに何人もの証人が出て来はしないわ。みんな母さんみたいに、はっきり物を言う女が嫌いなよ、そういう女が火焙りになって泣き喚くところが見

ただけなのよ！

ヨハン

マルガレーテ！

マルガレーテ

兄さん、あたし、今度のこと、協力できない。母さんを助けるためになんて動けない。あたしは今、マルガレーテ・ビンダーなの。牧師の妻で、三人の子供の母親なのよ。ケプラーの家とは、関係のない人間になりたいの！（去り掛けて戻り、ヨハンに抱きついて）ごめんなさい、兄さん！ あたし本当は自慢したいのよ。あの有名なヨハネス・ケプラーはあたしの兄さんだつて。あたしの兄さんは皇帝付きの数学者なんだつて！ でも、ケプラーの家は、捨てたいの！ あのならず者の父さんと、嫌われ者の母さんの娘でいたくないの……！

ヨハン

マルガレーテ、いいんだ。お前はぎりぎりまで母さんを庇ってくれていたんだろう。母さんが逮捕されるまで、お前、一人で母さんをみてくれていたんだ。あとは僕が闘うから。裁判になったら、お前は母さんと縁が切れていると言つて、いいんだからね。

マルガレーテ

兄さん、ごめんなさい。……うちの人の立場も分かつてね……

ヨハン　もう、いいよ、いいんだ、マルガレーテ。

マルガレーテ、出ていこうとして。

ヨハン　（呼び止め）マルガレーテ。

マルガレーテ、振り返る。

ヨハン　……洗濯物、ありがとう。

マルガレーテ、出ていく。

ヨハン　闘う？　僕が……？　バルバラ、せめて君が生きていてくれた

ら……！！

今はルター派の牧師になっているコリナスと、オルトル
ファスが入ってくる。

オルトルフアス ヨハン、裁判の日取りが決まったぞ。九月。ギユクリンゲンだ。

コリナス 教区牧師の情報ですから確かです。

ヨハン よし。じゃ、証拠集めと嘆願書の作成だな。

オルトルフアス ヨハン、お前、本気なのか。俺はお前の意志の弱さを知っている、これは途中で止めるわけにはいかないんだぞ。奴ら、証拠の一つにお前の科学小説まで持ち出している。月に行ったのがお前で、魔法を掛けたのが母親だなんて言っているんだ。おまけに司祭は、お前にも魔法使いの疑いがあるとまで言っている！今の自分の立場も考えろよ。

ヨハン 僕は人間の理性を信じている。理性こそが、人間の、有効な、唯一の武器だと信じてるんだ。

コリナス 先生。もしも、先生が本気で、この教区の、魔女裁判史上初の無罪判決を勝ち取ろうとしているのなら、皇帝を動かすべきです。

ヨハン 君は、人が理性よりも権力に、より簡単に動かされると言いたいのか。

コリナス

真理です。

転換。

同年、九月。ギユクリンゲン。裁判所ではなく、茅葺きの小屋。椅子とテーブルが設えてあるだけの暗い室内。火鉢の火だけが赤い。手に鎖を掛けられた母カテリーナが、ヨハンに付き添われて椅子に着く。

裁判長

証人を。

証人達、ぞろぞろと出て次々に証言する。

証人 1

母カテリーナ

バステイアン・マイヤーです。私の妻はこの女からもらった薬が元で、慢性の病気になり、やがて死にました。あんたの女房はもともと病気だったじゃないか！

証人 2

マリア・フリックです。私が煉瓦を運んでいたとき、あの女が前を通ったとたん、急に腕が痛くなって、私は煉瓦を落とすまいしました。

母カテリーナ

煉瓦の持ち過ぎさ！ 文句は親方に言いな。

証人 3

洋服屋のダニエル・シュミットです。この女が、揺り籠の中にいた私の赤ん坊に何か話しかけているのを見ました。その十日後、赤ん坊は死にました。何か呪文を掛けたんだ！

母カテリーナ

馬鹿馬鹿しい！

証人 4

ウルスラ・ラインボルトです。私はこの女の家でお茶を飲んだ翌日、家で出血しました。

母カテリーナ

ウルスラ、あんたの流産はあたしのお茶のせいだって言うの？

アインホルト判事

裁判長。この他、被告が魔女であるという訴えは、四十九項目に及びます。また、被告は審問所の司祭より、聖書からの聖句をもって訓戒されたとき、涙を流しませんでした。これは重大な物的証拠であります。

裁判長

被告は何か弁明がありますか？

母カテリーナ

……あたしの人生は、貧乏と暴力との戦いだった。人生との戦

アインホルト判事

いで泣きすぎて、今更流す涙なんて、残っちゃいないね

裁判長。今の言葉をお聞きいただいても分かりますように、この被告には全く反省の意思が見られません。従って、前例により、『説き聞かせの道具』を見せ、神の思し召しによって、罪の告白を促したいと思います。

母カテリーナ

説き聞かせの道具！ 拷問道具と言ったらどうだい！

ヨハン

母さん！

裁判長

許可します。

アインホルト判事

被告以外の方々はご覧にならないように。(拷問具が置いてある隣室のドアを開ける) あれが、鞭。親指締め。火ごて、やっ
とこ、拷問台、吊し落とし、炭火針、水責め桶……

ヨハン

やめろー!!!

アインホルト判事

みなさん、この期に及んでも、被告は泣きもしない！ これ
人間であるものか！ さあ、選べ！ 自白か、説き聞かせの道
具に掛かるか！

母カテリーナ

あたしは魔女じゃない、人間だ！ 例え体中の血管を一本ずつ
引きちぎられようと、何一つ認めることなんかないからね！

ヨハン
母さん！

アインホルト判事
裁判長、この女の体に穴を開ける許可を。

ヨハン
そんな馬鹿な！

裁判長
許可はならん。ただいま、フェルデナント皇帝陛下よりの親書が届けられた。ここに、被告の無罪を言い渡す。被告は何か、言うべき言葉はあるか。

母カテリーナ
……茶番だね。

ヨハン
……！

ヨハン、倒れる。

母カテリーナ
お前が倒れてどうするんだい！

裁判長
閉廷！

暗転

明かりがつくと、レオンベルクのケプラーの家。裁判の

数時間後。

ヨハンがソファに寝かされている。そこにオーベルドルファー、コリナスが付き添っている。ハインリヒと天使もいる。

オーベルドルファー

ヨハン、君、奥さんと下の息子さんが亡くなってから、まとも
に食べてないんじゃないのか？

ヨハン

え？ ……スザンナとルドヴィツヒには、宿屋のおかみさんが
食べさせてくれてるよ。レギーナはもう、夫に食べさせて
もらっているしね。

オーベルドルファー

君のことを聞いているんだ。時々俺には君が分からないよ。さ
っこれ、飲んで。

ヨハン

ありがとう。

オーベルドルファー

ねえ、ヨハン、皇帝は財政難を理由に、君の給料を、もう、二
千フロリンも未払いのままにしてるっていうじゃないか？

コリナス

そんな！

オーベルドルファー

なのに君ときたら、レギーナちゃんの遺産一万フロリンには全

く手を付けずに、持参金として持たせてやっちまっている。養育費としてもらったって良さそうなものなのに。

ヨハン
あれは、あの子の父親があの子のために残した物だ、僕に権利があるとは思わない。僕はあの子がいてくれるだけで幸せだったしね。

オーベルドルファー

まあ、自分が弱いということも、自覚しろよ。

ヨハン
十分自覚しているよ。何故、僕は母に似なかつたんだろうね。

コリナス
僕は先生が弱いと思ったことはありませんね。

ヨハン
え？

コリナス
本当に弱い人間は自分の弱さなんか認めませんよ。先生は少なくとも自分の弱さと卑屈さから目を背ける事ありませんからね。

ヨハン
馬鹿なだけだよ。

コリナス
じゃ、その馬鹿は、今回何をなさったんですか？

ヨハン
何って？

コリナス
貴方のお仕えする、偉大なる皇帝陛下に対してですよ。

ヨハン
コリナス。誤解をしてはいけない。僕は皇帝に仕えているんじ

やない。科学者は只、人類の幸福にのみ仕えているんだ。まして今の皇帝は、かつて僕をグラーツから追放したあのフェルデナントだ。僕は彼を一生の敵だと思っている。

じゃ、その一生の敵に何をなさって、親書を取り付けたんですか。

……。

ヨハン

先生！

ヨハン

実は……運勢占いを、ちよつと。

コリナス

やつぱり先生は変わっていない！

ヨハン

君は僕を軽蔑するんだね。

コリナス

いえ、尊敬してゐるんです。

マルガレーテが入ってくる。

ヨハン

(立ち上がって) マルガレーテ、いいのかい。

マルガレーテ

なにが？ 母さんは無実だったのよ。誰に遠慮することないわ。そうでしょう？

ヨハン　　マルガレーテ……（抱き合う）

マルガレーテ　兄さん、あたし、今日ほど兄さんが誇らしかったことはないわ。

兄さんは本当に皇帝陛下にお仕えしているのね！

ヨハン　　ん……うん（コリナスを気にする。彼は隠れて笑っている）

マルガレーテ　母さん、もうすぐ戻るわ。手続きが終わり次第オルトルファス

さんが連れてきて下さるって。あたし、山羊のミルクを温めてくる。いくら気丈な母さんだって、あれだけ長いこと牢獄に繋がれていたんだもの、（ヨハンの様子を見て）兄さんも飲む？

ヨハン　　ああ、頼む。

マルガレーテ、台所に行く。

と、ドアがノックされる。ヨハンがドアを開けると、オルトルファスに付き添われ、毛布にくるまって立っている母カテリーナがいる。

ヨハン　　母さん……。

オルトルファス　　イスを。

オーベルドルファー

ああ。

二人、カテリーナをソファに座らせてやる。カテリーナ、
浅く座る。

母カテリーナ

…もたれると、背中が痛くてね。

オーベルドルファー

ちよつと失礼。(背中を見る)

ヨハン

どうしたんだ、オーベルドルファー…。

オーベルドルファー

…お母さん、拷問は、なかったんですよね。

母カテリーナ

拷問は、なかったよ。

オーベルドルファー

じゃ、これは…

母カテリーナ

…あたしは、牢番にとって、素直な囚人じゃなかったからね…

…

音がして全員が振り返ると、マルガレーテがミルクのコップを落として震えている。

マルガレーテ 母さん！

母カテリーナ ちよつと、ごめんよ……（肘掛けに頭をもたせ掛ける）

ヨハン 母さん……！ あいつら何を、母さんに何をしたんです！

オーベルドルファア 熱がある。オルトルファス！

オルトルファス ああ。（オーベルドルファアと二人でカテリーナを抱き起こす）

オーベルドルファア ベッドへ。

ヨハン 母さん！

オーベルドルファア マルガレーテさん、手伝っていただけますか？

マルガレーテ はい……

ヨハン 母さん……母さん……母さん！

母カテリーナ ヨハン！

全員、止まる。

母カテリーナ 騒ぐんじゃないよ……これくらいのことです。どこにだってあるこ

とき。

頼れそうになる。三人に支えられ、奥へ。

ハインリヒ

兄ちゃん、母さんどうしたの？ どうしたの？

ヨハン

……（奥へ行く）

コリナス

先生、

ヨハン

（モップを取りに行く）

ハインリヒ

（ヨハンの後を付いて、奥に引っ込んででも言い続けている）
ねえ、兄ちゃん、母さんどうしたの？ 怪我したの？ 病気なの？ 死んじゃうの？ ねえ、兄ちゃん。僕、ヤダ。レオンベルクもうヤダよ、みんなね、僕がね、子牛に乗ったたら母さんが魔法で殺したって言うしね、牛のミルクは売ってくれないしね。

ヨハン、バケツとモップを持って出てくる。

ハインリヒ

兄ちゃんが悪いんだよ！

ヨハン

（一瞬ハインリヒを見るが、すぐにミルクを拭き始める）

ハインリヒ

レオンベルクなんかやめて、みんなで、月に行っちゃえばよかったんだよ。僕もう、大きくなったでしょ、早く連れてってよ。ねえ、兄ちゃん月、月行こうよ、月、みんなでさあ。

ヨハン

(ミルクを拭きながら) ハインリヒ……人間は、月にはいけないんだ……(ハインリヒを見て) 人間は、月になんか、行けないんだよ。

ハインリヒ

……ウツソだあ……???

コリナス

そうです……嘘です！ ……嘘ですよね、先生。

ヨハン

……。

コリナス

先生！

ハインリヒ

嘘吐き、兄ちゃんの嘘吐き、嘘吐き！

コリナス

……「ガリレオ・ガリレウス、私は、人間の理性というものを信じています。いつの日か、人類は宇宙空間に適合した帆船を作り出すことでしょう。そうすれば、身渡すかぎりの虚空を恐れぬ人々が、たくさん現れるでしょう。その時の、勇敢な宇宙の旅行者達のために、私たちは水先案内人として、地図を作っておこうじゃありませんか。」……先生、あなたの言葉です。あな

たが言ったんです。「いつの日か、人類は、

ヨハン やめろ、コリナス……。

コリナス 人類は、宇宙空間に適合した帆船を作り出すことでしよう……。

ヨハン コリナス！

コリナス その時の、勇敢な宇宙の旅行者達のために、私たちは、水先案内人として、

ヨハン 人間は、飛べない……。

ハインリヒ (泣く) 兄ちゃんの、嘔吐きー！

コリナス ……違う……違う……！……あなたが、そんなことを、言うはずがない、そんなことを、言っていないはずがない、

ヨハン コリナス……。

コリナス ……本気、ですか？

ヨハン 真理だ、……。

コリナス それなら僕は、……僕は、あなたを、軽蔑します！ ……金輪際、軽蔑し続けてやる。(ヨハンの旅行鞆の中から『宇宙の調和』

の未完成の草稿を出す) いりませんよね、こんなもの。

ヨハン ……。

コリナス あなたはもうやめたんだ。人間の理性を信じることも、未来の

ために、宇宙の地図を書くことも、やめたんだ、あなたは！
いつの日か、人類が作る、宇宙に飛び立つ帆船を信じることも、
やめたんだ、やめたんだ、あなたは！

ヨハン
コリナス！

コリナス なぜ、書いたんです、それなら、なぜ、こんなものを……！
あ
なたの本です、未完成の『宇宙の調和』！ ……僕は、僕は
いつもあなたの本に、度肝を抜かされてきました。惑星は楕円軌
道を描く！ こんな大胆なことを考えた人間が、かつていまし
たか！

天使 そうだ、いない！

コリナス あなたは、有史以来、初めて、惑星を円軌道から解き放った。

天使 そうだ、ケプラーの第一法則だ！

コリナス あなたの発見は、僕にとって、いつでも、晴天の霹靂だった。
公転する惑星のスピードが一定でないなんて！ 太陽から惑
星に至る直線が、等時間に等面積を描くなんて、

天使 第二法則！

コリナス 天文学に、幾何学と、時間と物理学の概念を持ち込むなんて発

想、誰にできる！

天使 ケプラーの仕事はケプラーにしかできない！

コリナス そして、この、『宇宙の調和』！ この中であなたは、ついに、

太陽と惑星の比率を定式化した。惑星の公転周期の二乗は太陽からの平均距離の三乗に比例する。

天使 第三法則！ 太陽の視点だ！

コリナス 人間が！ 人間が、太陽に立つことを考えなければ出来ない計

算！ 有史以来、すべての天文学者が地球から計算していた惑星軌道を、あなたは、はじめて太陽から計算していた！ こんな大胆な発想の転換、誰に出来る！ そうやって、地図を作っていたはずなんだ、あなたは！ ここまで、何世紀にも渡って信じられてきた、宇宙の形そのものを変えてしまったんだ、そんなあなたが、いまさら……

ヨハン コリナス！ 違う！ ……宇宙の形は、変わっていない。変化し

ているのは、人間の視野の方だ。僕達は、いつでも、簡単に、誰かが何かを発見すると、事実そのものが、変わってしまった

ように考えるけど、真理は……

コリナス

真理は？

ヨハン
真理は変化しない……。大事なことは、誰が、最初に、何を発見したかなんて、そんなことではない……。大事なことは、気付いた真実を、人類と、人類の子供達のために、どう使うかということなんだ。

コリナス

はい……はい……！

ヨハン

そしてコリナス、僕がこの『宇宙の調和』の中で言いたかった本当の真理は、そんな事じゃない。僕が発見したのは、宇宙のシンフォニーだ。宇宙の、生きとし生けるものはすべて、人間も、惑星も、調和したいと願いながら、シンフォニーを奏でている、調和の歌を歌っている、ということなんだ。

天使

……宇宙の、シンフォニー……

宇宙の、シンフォニーが聞こえてくる。

ヨハン

コリナス。なぜ、この宇宙には、比率というものがあるのか。

人間の体にも、惑星の距離や周期にも、幾何学にも、音楽にも。僕はね、コリナス、神は、これら比率の中に、何かのメッセーヂを残されているのじゃないかと考えたんだ。だから僕は、音楽の協和音に示される調和比を、惑星の様々な比率に割り振ってみた。周期、距離、体積、速度、時間……でも、駄目だった。そして、最後に僕は気づいたんだ。地球を離れて、太陽に行ってみようって。太陽……僕らの宇宙の中心、動かぬ真理、神の目の位置で、僕らの宇宙を見てみようって。そして、太陽から、六つの惑星への角速度の変化を計算してみたんだ。するとその最大角速度と最小角速度の比率は、音楽の、全音階の音程に一致したんだよ。惑星の音階を楽譜にすることさえできた。土星の角速度比率は一〇六対一三五で四対五の長三度のコントラバス。木星はバス。火星はテノール、金星はアルト、水星はソプラノ！そして地球は、遠日点角速度五七・三、近日点角速度六一・六八、十五対十六の半音程のコントラアルト！全ての比率が当てはまるんだ！こんな事が偶然であるはずがない。これは法則だ！宇宙は、調和するシンフォニーを奏でて

いるという、法則なんだ……そして、地球の、この半音程は、長音の旋律音階に当てはめると遠日点に置いてミ、近日点において、ファになる。地球の運動は、ミ、ファ、ミ、なんだ。ミ、ファ、ミ……。僕はこれを数学以外のもう一つの神の言葉、ラテン語に当てはめた。するとミはミゼリ、貧しさ、ファはファミン、飢餓。地球は貧しく、今日も飢えていると歌いながら、太陽という神の周りを巡り、宇宙のシンフォニーに参加しているんだ……。

ハインリヒ
ミ、ファ、ミ、ミファ、ミ……。

ヨハン・コリナス
……（ハインリヒを見る）

ハインリヒ
兄ちゃん、地球って歌手なの？

ヨハン
……うん……そうだよ。

ハインリヒ
じゃ、僕と一緒にだね！

ヨハン
え？

ハインリヒ
（歌う）ぼ、ぼ、僕は月に行く、月に行く。

コリナス
いいなあ。ハインリヒさん、僕も連れて行って下さいよ。

ハインリヒ
どっしよっかなあー、いいよね、兄ちゃん？

ヨハン ……ああ。

ハインリヒ ぼ、ぼ、僕は月に行く、(戸口に駆け寄る)

ヨハン おい、どこに行くんだ。

ハインリヒ 山羊のミルクを取ってくるー！ 母さんに飲ませるのだー！

コリナス (ハインリヒについて行こうとし) あ、ハインリヒさん、コツプ。

ハインリヒ (天使に) 大丈夫。兄ちゃんの傍にいいよ。

コリナス (笑う)

ハインリヒ、出ていく。

コリナス 先生、少し休まれたらいかがですか？

ヨハン うん。

コリナス (戸口で振り返り) やっぱりハインリヒさんを見えます。また、山羊を逃がしでもすると大ごとですから。

ヨハン 頼むよ。…コリナス、ありがとう。

コリナス (深く一礼し、出ていく)

き込む。

ヨハン、ソファに寝ころぶ。

天使、躊躇しながらも、カテリーナのシヨールに手を伸ばし、拾う。拾えた！

天使、戸惑いつつ、それをヨハンにそっと掛け、顔をのぞ

天使 ケプラーの第一法則、神は無意味な生命を創らない。第二法則、

宇宙は調和したいと願いながら、シンフォニーを奏でている。第三法則、地球は、今日も貧しく飢えていると歌いながら、宇宙の調和のシンフォニーに、参加している……近代科学は、貴方の法則をそうは伝えなかった。たとえ、それがただの妄想だとしても、なんと美しい妄想だ。

ヨハン (起きて) 誰？

天使 見えるのか？ 聞こえる？

ヨハン はつきりとは……でも、分かります。

天使 でも、しかし、なんで、いや、何ででもいい。例えこれが何か

の夢でも間違いでも。お会い、したかったです。ヨハネス・ケ
プラー。

ヨハン 僕に？ あなたは一体……？

天使 私は、二十世紀に、宇宙に行った人間です。宇宙飛行士でした。

ヨハン 宇宙……なんだって？

天使 飛行士。私は、月に、行きました。

ヨハン 月？ 月に？ 人間が？ 人間ですか、あなた？

天使 人間でした。月に、立ちました。月から、地球を、見ました。

ヨハン ……あ……月に……月に人間が、人間は……二十世紀？ ……

三百年以上……でも、いくんだ、そうか……行くのか……地球
は、回っていませんか？

天使 ええ。

ヨハン 国境は、見えましたか？

天使 いいえ。

ヨハン 地球は、歌っていましたか？

天使 ……ええ、そうですね、ええ。

ヨハン そう……ああ、そうか！ 行くんだ……月に、人間は。じゃあ、

僕はやっぱり、人間の理性を、信じていいんだ……行くんだ、月に……ありがとう。

ヨハンは眠る。

天使

俺は、本当を言うと、ただ単に月に最初に立ったのが俺じゃなくて、ニール・アームストロングだったのが悔しかったのかなりせこい人間なんです。だから、『人類史上、初めて月に立ったのはヨハネス・ケプラーだった』なんて事を悔し紛れに言ってみたくて……そのうち本当にそんな気がしてきて、ちよつと、会ってみたかったんです、会いたかったんです……ヨハネス・ケプラー。

勢いよく音を立てて、コリナスが入ってくる。

コリナス

先生、先生ー！

ヨハン

（起きる）

コリナス 先生、ハインリヒさんが、山羊に蹴られて、

ヨハン また、あいつは、

コリナス 死にました……！

ヨハン ……な、に？

天使 そんな……！！（急いで出ていく）

ヨハン 何だって、コリナス！

コリナス ハインリヒさんが、山羊に蹴られて、死にました。

ヨハン、戸口に走る。戸口で、杖を付きながらも急いで来たメストリンとぶつかる。

この時、天使になったハインリヒが戸口から入ってくる。

メストリン ヨハン、大変や、お前すぐ、プラハに帰れ！

コリナス 教授、それどころじゃないんです！

メストリン 何いうてんねん。この報せより「それどころじゃない」ものがあるか！

プラハで戦争が始まったんや！

ヨハン え？

オルトルファス・オーベルドルファアー 戦争！？

メストリン

ホーエンドルフが報せてくれたんや！ お前、子供達をプラハに残してきてるやろ！ すぐ、帰ったれ！ 戦争だけやない、また、ルター派の弾圧や。プラハから、プロテスタントは一人残らず追放や！ ぐずぐずしとる場合やないで！

オーベルドルファアー

ヨハン、急いだ方がいい。

オルトルファス

後のことは俺たちに任せろ。

メストリン

さあ、早く。

コリナス

先生！

どこからともなく宇宙のシンフォニーが聞こえてくるそれが大砲の音にかき消されていく。

ヨハン

（天使を探し）そこにおられますか？ それでも人類は月に行けるんですね？

ハインリヒ

（笑って）うん、行くよ。

その声が聞こえたはずはない。ヨハン達は、現実に対処
すべく、出ていく。

戸口が開いて、天使が入ってくる。

天使

こんな所にいた！ おいおい、なんだよ、その格好は……。

ハインリヒ

兄ちゃんと話せた？ 兄ちゃんのこと本当に好きなんだね。迎

えに来たよー！

天使

迎えに行くのは俺の役目だろうが！

ハインリヒ

違うよ。

天使

違う？ 何が？

ハインリヒ

僕、守護天使なの。

天使

守護天使？ 誰の？

ハインリヒ

へへへ、あなたの。僕、「誰の守護天使になりたい？」って聞か
れたから、「僕の守護天使だった人の守護天使になりたい」って
言ったんだ。

天使

えー？ じゃ、俺、お前に守られてたわけ？ 道理で、運の悪
い人生だったはずだよ。

ハインリヒ

僕の運は良かったよ。あなたについて月に行けちゃったもんねー。ありがとうでした。

天使

はいは(い)：(突然、気づき)そうか……そういうことか！ヨハンが、弟にした約束をかなえるために、おれはこいつの……(彼を天使にしたものに)こうやって……四百年もの時をかけて、たった一つの約束を………：……けっこう、大変だね、あなたも。

ハインリヒ

地球、きれいだったね。

天使

うん。漆黒の闇の中、本当に、地上には絶対がない全くの黒の中の黒の闇。その黒の中に、針で穴を開けたような無数の恒星が瞬きもせずに冷たく俺を見る。そんな冷たい色のない世界の中で、そこだけまるで奇跡のように、青い青いビー玉が浮かんでいる。本当に、見渡す限りそこにしかないんだ、命を感じる物が。愛おしくて、愛おしくて、儂いくらい青かった。

ハインリヒ

僕さ、あれがきれいだったな。あの、ちらちらする赤い、すごく綺麗な光。花火みたいでさ、

天使

ああ、あれね。あんまり綺麗なんで、俺も先輩に聞いたよ。「あ

れなんですか」って。そしたら、先輩が、「ああ、お前、あれは、ベトナムだよ」って答えた。

ハインリヒ
ベトナム？

天使
ああ。

間

ハインリヒ
へー、ベトナムかあ。…どいこと？

天使
さて、行きますか、そろそろ。

ハインリヒ
ねえ、僕らさ、どこいくのかな。ドキドキだね。

天使
さあね。

ハインリヒ
僕、もし生まれ変わったらさあ、また、月行きたいなあ。あの花火きれいだったよねえ。また見られるかなあ。

天使
まだ当分ね。

ハインリヒ
いつまで？

天使
さあね…。

二人、戸口から出ていく。戸口を開けると地球が見える。地球の中に、美しい花火が見える。大砲の音が聞こえる。宇宙のシンフォニーが、それでも歌っている。かき消されることなく、多分……きっと……今日も…。

幕

〈主な参考・引用文献〉

- 『ヨハネス・ケプラー・近代宇宙観の夜明け』アーサー・ケストラー（『夢遊病者たち』）
訳 小尾信弥・木村博 河出書房新社
- 『宇宙の神秘』ヨハネス・ケプラー 訳 大槻真一郎・岸本良彦 工作舎
- 『ケプラーの憂鬱』ジョン・バンヴィル 訳 高橋和久・小熊令子 工作舎
- 『ケプラーと世界の調和』渡辺正雄 共立出版株式会社
- 『ケプラーの夢』ヨハネス・ケプラー 訳 渡辺正雄・榎本恵美子 講談社学術文庫
- 『宇宙からの帰還』立花隆 中央公論社
- 『科学入門』武谷三男 勁草書房
- 『科学者とキリスト教』渡辺正雄 講談社 BLUE BACKS
- 『異端審問』ギー・テスタス ジャン・テスタス 訳 安斎和雄 白水社
- 『文化としての近代科学』渡辺正雄 丸善株式会社
- 『ガリレオたちの仕事場』金子務 ちくまライブラリー
- 『ガリレオの弁明』トンマーズ・カンパネツラ 訳 澤井繁雄 工作舎
- 『神を背に立つ改革者 ルターとカルヴァン』富本健輔 清水新書
- 『ドイツ史』（増補改訂版）林健太郎編 山川出版社
- 『旧新約聖書』 日本聖書協会

